れを爲す場合の彼の悅びもいよいよ大きくなる。しかし同時に、ここに『すつかり』と呼ばれてゐるところのものに對する彼の要求はより嚴しくなつて來る。彼は此意味に於て不完全たるを免れないすべてのものをわきへとりのける。彼は半ば解くことの出來るものに對して一の反感及び一の躁感を獲得する——ただ一般的に漠然と一種のたしかさを與へるにすぎないすべての物に對して。彼のうら若き計畫は彼の目の前に潰崩する。そこには僅かな小さな結び目のほかに殆んど何物も殘つてゐない——それを解くに當つて今かの先生は彼の悅びをとり、彼の力を示すのである。さて、すべての斯うした有用な、休みなき活動の中に、今や年寄りになつてゐる彼は、突然に、また屢〻深き不機嫌に、一種の良心の苛責に襲はれる。彼は彼自らを變化したものとして見る——あだかも彼が小さくされ、低くされ、巧妙なる侏儒にまで作りかへられてゐたかのごとく。彼は小さな事柄に於て練達してゐるのが便利であるかないか、生活と形貌との偉大人に對する請求からの逃避であるかないかを氣がかりになつて來る。しかしながら彼はもはや通り越して行くことが出來ない——そのときはすぎてゐる。

一八〇

書物の時代に於ける教師等。——自己教育と相互教育とがより普遍的になりつつある今日、教師はその通常の形に於て殆んど無用なものになつてしまはねばならない。一所にある事の知識を獲たいとねがふ、學問ずきな友人等は、我々の書物の時代にあつては、『學校』や『教師』よりもより手短かな、そしてより自然な方法を見出すのである。

一八一

大なる有用としての虛榮心。——本來力强き個人はただに自然をばかりでなく、社會やより弱き個人をすらも、劫掠の目的物にする。彼はそれらのものを、出來る限り使ひ盡し、そしてずん〳〵と行つてしまふ。彼がまことに不安な生活をしてゐる間（飢餓と飽滿との間を往來しながら、）彼は彼が食ひ盡し得るよりもより多くの動物を殺す。そして必要であるよりも以上に、人々を掠奪したり虐待したりする。彼の權力の表明は同時にまた、彼の苦しく痛ましき情態に對する復讐の表明でもある。その上、彼は彼があるよりも以上に力强く思はれようとする。かくていろ〳〵の機會を惡用する。彼が生むところの恐怖の增加は彼の權力の增加である。彼は程なく氣付く——彼は彼が何であるかによつてでなく、むしろ彼が何であると思はれるかによつて、支持されたり引き倒されたりするのだと言ふことを。ここに虛榮心の起源がある。權力のある者はあらゆる手段を盡しても、彼の權力に對する信仰

を增させるようにとつとめる。彼の前に震へ彼に奉仕するところの奴隷共は又知つてゐる、彼等が彼にまで値してゐると見えるだけ、丁度それだけ多く値してゐることを。そこで彼等自らの自己滿足にまでよりもかうした他人からの評價にまで目をやりながら働いてゐる。我々は虛榮心を、ただ最も弱められた形に於てのみ、その蒸溜と少量とに於てのみ知つてゐる。なぜならば我々はおそくなつた、甚だ柔弱になつた社會情態の中に生活してゐるのだから。本來虛榮心は大なる有用であり、保存の最も有力な手段である。そして實に虛榮心が大きくなればなるほど、個人はいよいよ賢くなる。なぜならば權力に對する信仰の增加は、權力そのものの增加よりも容易であるから——ただし、それは理智をもつてゐる、或は(原始情態に於てあらねばならぬごとく)狡猾にして巧妙なる人々にとつてのみ。

一八二

文明の天候記號。——文明の決定的な天候記號はまことに少いので、我々は我々の家や庭園の中に用ひるべき、少くとも一の間違なき記號を手にしたことを悅ばしく思はなければならぬ。ある人が我我に屬するか、或は屬しないかを(自由思想家のつもりだ)吟味する爲めには、我々は基督敎に對する彼の感情を吟味して見なければならない。もしも彼れが批評的といふより他の目を以て基督敎を見るならば、我々は彼に背をむける。彼は我々に不純の空氣と惡しき天候とをもたらすのである。かくのごとき人々に、シロッコオ風が何であるかを敎へるのは、もはや我々の任務でない。彼等はモオゼや天候の並びに啓明の豫言者をもつてゐる。もし彼等が此等の人々に聽かうとしないならば、そのときは——

一八三

憤怒と刑罰とに對しては相當の時がある。——憤怒と刑罰とは動物性からの我々の相續物である。人間は彼がこの搖籃の贈物を動物に返したときにはじめて丁年に達する。ここに人々のもち得る最も大なる思想の一が埋れてゐる——あらゆる進步の中の進步に對する思想が。私の友よ、我々をして數千年の間を共に前進せしめよ！そこには尙ほ甚だ多くの悅びが人々の爲めに保存されてゐる。そしてそれの如何なる匂もまだ現今の人々にまで吹きつけられないでゐた！げに我々はこの悅びを我々自らに約束することが出來る。否、何等かの必要なものとしてまぢなひ出し呼び寄せることが出來る——人間的理性の發展さへ停止しない限りは！他日我々はもはや、すべての憤怒や刑罰に待ち伏せしてゐる論理的罪惡(個人によつて、或は社會によつて犯されたる)にまで和解されないであらう——他日、

胸と頭とが今日互に相離れてゐるだけ、それだけ互に相近づいて住むことを學んだ曉には。彼等がもはや本來のごとくそれ丈け離れて立たないことは、人間性の全進路に目をやればかなり明らかである。內的作業の生活を觀望せねばならない個人は、尊大なる悅びを以つて、打ち克たれたる隔離を、到達されたる接近を意識するであらう——そこで更により大なる希望へ思ひ切つてはいることを得る爲るために。

一八四

『悲觀主義者』の起源。——善き食物の一口は屢〻、我々が落ち込んだ目を以て、或は望み多く將來を觀やるかを決定する。これは最も高きもの、最も精神的な處にまで達する。不平と厭世とは今日の時代にとつて空腹を忍んだ先祖等からの遺產である。我々の藝術家等詩人等に於てすらも我々は屢〻認める——彼等自らがいかほど潤澤に生活してゐようとも、彼等は何等のよき素性をもつてゐないと言ふこと、また彼等が壓抑されて生活し惡しく扶養されたる先祖等から、さまざまなものを血液と頭腦との中へ相續して居り、そしてそれがまた彼等の作品に於て對象として並びに選ばれたる色彩として見えて來ると言ふことを、希臘人の文明は財產ある人間の、しかももとから財產ある人間の文明である。彼等は二三世紀を通じて我々よりもより善く生活した（各の意味に於てより善く、とり分け飲食に於てずつとより單純に。）そこで遂に頭腦が左樣に一杯にまた精かになつた。そして血が一の悅ばしげな、朗かな葡萄酒のごとく左樣に荒く流れた——彼等の中なる善良なる者最も善良なる者が、もはや陰鬱に、ねぢけて、荒つぽく現れないで、むしろ美しく日當りよげに現れて來たほどに。

一八五

理性的な死について。——器械から要求された仕事の成しとげられたとき、その器械をとめるのがより理性的であるか、それとも、それが自らにしてとまるまで、言ひ換へればそれが破壞されたまで走らして置くのがより理性的であるか？後者は保存費を無駄にするもの、奉仕する人間の力と注意とを濫用するものではないか？他處で甚だ必要なものがここで放棄されてゐるではないか？一般に器械に對する輕蔑の一種すらも擴げられるではないか？——それらの物の多くが用もなく貯へられ仕掛けられてゐるといふことによつて。私は故意ならぬ（自然的の）死と、故意の（理性的の）死とについて言つてゐるのである。自然的の死はあらゆる理性から獨立してゐる。そして本當に非理性的の死であり、その中では殼の憐むべき實質が、如何に久しく核心の存立すべきや否やについて決定する。さればそ

の中ではいぢけた往々病身な、そして間のぬけた獄卒が主であり、彼の高貴なる囚人の死ぬべき點を指示する。自然的の死は自然の自殺である。云ひ換へれば、理性的な事物を、それに結びつけられたる非理性的な事物によつて滅却することである。ただ宗教的の啓明の下にのみその反對の事が現れ得るのである。なぜならばそのとき公正であるごとく、より高き理性(神の)がその命令を下し、それにより低き理性が從はねばならないから。宗教的な考へかたをほかにしては、自然的な死は何等の讃美を値しない。死についての賢き指圖と命令とは、かの今日のところ全く理解しがたき、そして不道德にひびく將來の道德に屬してゐる。しかもそれの曉明が眺めるのは名狀すべからざる悅びであらねばならぬ。

一八六

逆行的影響。——すべての犯罪者等は、彼等が丁度そのとき置かれてゐるよりも、文明のより夙き階級にまで社會を押しもどす。彼等は逆行的に影響する。我々をして社會が正當防衛の爲めに自ら調達し保留せねばならないところの道具を考へしめよ、狡猾な探偵や、獄卒や、處刑者などを考へしめよ。また我々は公認の告發者や辯護者なぞの事をも忘れてはならぬ。最後に我々は自ら問うて見なければならぬ——司法官自身や、刑罰や、また裁判手續の全體が犯罪者ならぬ者に及ぼすその結果に於て、持ち上げるところの現象であるよりもずつと抑へつけるところの現象でないかどうかと云ふことを。しかしながら正當防衛と復讐とを無邪氣の衣裳に包むことは到底成功しないであらう。そして人間が社會の目的にまで手段として使用され犧牲にされてゐる限り、すべてのより高き人間性はこれについて悲むのである。

一八七

藥劑としての戰爭。——衰弱して輕蔑すべくなりつつある國民共にまで、戰爭は藥劑としてすすめらるべきてある——もしもその國民共にしてまだ本當に生きて行かうとねがふならば。なぜと云つて國民的肺勞にも蟹的な療法があるのだから。しかしながら永久に生きんとする意志及び死に得ないと云ふことは、それ自體に於て既に感情の老成の徵候である。我々はより十分により有爲に生きてゐればゐるほど、いよいよより速かに進んで、單一の善き感情の爲めに生活を犧牲にする。かくのごとく生き且つ感ずるところのある國民は、一向に戰爭を要しないのである。

一八八

藥劑としての精神的並びに肉體的移植。――さまざまな文明はさまざまな精神的風土であり、その風土の各の一は、此の有機體或は彼の有機體にまで、特に有害であり或は有効である。總じて歴史は、さまざまな文明に關する智識として、藥劑學ではあるけれど、治療法其物の學問ではない。これらの藥劑を使用する(各人を彼にうまく適當した風土へ――一時的に或は永久に――送るべく)ところの醫師はやつぱり必要である。ある單一な文明の範圍内にあつて、現在の中に生きると云ふには、普遍的醫藥として十分でない。此大氣の中に自由に呼吸し得ない、あまりに多くの甚だ有用な人間は滅亡するであらう。歴史の助けをかりて我々は彼等に空氣を作つてやり、そして彼を保存するやうにつとめなければならぬ。おくれた文明の人々すらも彼等の價値をもつてゐる。理智のかうした治療に加へて、人類は肉體上關係に於て、醫學的地理學によつて發見することを努めねばならぬ――如何なる種類の墮落と疾病とにまで地上の各の地方が動因を與へるかを、また反對に、健康の如何なる成分をそれが賦與するかを。また次ぎには、漸次國民や、家族や、個人が彼等の遺傳した肉體的疾病の主になるべく彼等にとつて十分久しく持續的に移植されねばならぬ。世界全體がつひには養生院の一總額となるであらう。

一八九

人類の木と理性と。――汝等が世界の人口超過として年寄りの短見に於て恐れるところのものは、より多く希望に充ちたる者に大なる任務を與へる。人間は早晩全世界を覆ふところの一本の木(すべてが相並んで果實になるべき百千の花をもつた)にならねばならぬ。そして世界その物は此木の營養に對して準備されねばならぬ。今のところまだ小さな發芽が汁氣と力とを增し得ると、其汁氣が全體と各部分との營養に對して無數の水道をなして流れ得ること、此等のそして同じやうな仕事から我々は、今日の人間が有用であるか、それとも無用であるかを測定すべき標準をとり出さねばならぬ。この仕事は名狀しがたく大きく不敵な仕事である。我々一同は、その木が時の來ないのに朽ち去らないことの爲めに盡したいものだ！　歴史的な頭腦は恐らく、あらゆる時代の人間的活動をその目の前に呼び出すことに成功するであらう――蟻の社會がそのうまく積み上げられた塔を以て我々の目の前に立つごとく。皮相的に批判すれば、全體としての人類は蟻屬のごとく、我々をして『本能』について語らしめるであらう。より嚴密な吟味に於て我々は認知する、如何に諸の國民全體が、前世紀の全體が人

類の大なる集團を利し、かくて最後に大なる人類共通の果樹を利すると云ふ新しき手段を發見し吟味すべく骨折るかを。かうした吟味の手續きに於て、個々の國民或は時期が如何樣なる傷害を受けようとも、彼等は各この傷害を通じて賢くなつた。そして彼等から智慧の潮は、全人種及び全時期の原理の上へ徐ろに流れて行く。蟻もまた路を迷ひやりそこなひをやる。人類はその方策の馬鹿らしさによつて、しかるべき時の前に腐敗と枯凋とに陷りかねない。前者にとつても、後者にとつても、たしかな案内者的な本能は一もない。むしろ我々は最も大きな、最も悅ばしき多產をもつた植物の爲めに世界を準備すると云ふ大きな仕事に敢然として立ち向はなければならぬ ―― 理性に對する理性の仕事に！

一九〇

無私の讃美とその起源。――二人の相隣れる酋長等の間に多年の爭鬪があつた。彼等は互に他の領土を荒らし、家畜を掠め、家を燒き拂つたが、全體の上にきつぱりとした結果を來さなかつた――なぜならば彼等の力がうまく平均してゐたから。ある第三者は、その所有物のかけ離れた地位によつて斯うした爭から超越し得てゐたけれど、尙ほ且つ此等の喧嘩好きな隣人の一方が截然たる優勢を占めるべき日を恐れずにゐられなかつた第三者は、遂に儀式張つた好意を以て爭鬪者共の間へはひつた。內內彼は、各をして次ぎの事を呑み込ましめて、その平和の提議に賛目をそへた――今後、その平和を援すところのものに對し、他の者と力を合せて當らうといふことを。二人は彼の前に相會した。彼等はこれまで道具であり、且つあまりに屢々憎惡の原因であつたところの手を、躊躇しながら彼の手の中に置いた。そして實際、彼等は眞面目に平和を保たうとつとめた。各は如何に突如として彼の幸福が、彼の安寧が增加したかを驚きながら見た――如何に彼が今隣人に於て、意地惡き或は公然侮蔑的な非行者の代りに、交易の好きな商人をもつたかを、加之如何に、豫知されない困厄に於て、彼等が互に他を難澁から救ひ出し得た（これまでのごとく、隣人のかうした難澁に乘じて利を收め、その絕頂にまでのぼつて行くことの代りに）かを。げにあだかも、人間の典型がそののち双方の國土に於て立派になつたかのやうに見えた。なぜと云つて目がより明らかになり、額がその皺をのばしたから。すべての者が今は將來にまでの信任を感得した。そして人々の精神と肉體とにまで、この信任より以上に役に立つ何物もないのである。彼等は每年同盟の紀念日に相會した――酋長等も竝びにその附屬者等も。しかもかの仲介者の面前で。その仲介者のやりかたを彼等は、彼等が負ふところの利益の大きければ大きいほど、いよいよ多く驚嘆し且つ尊敬した。彼等は彼のやりかたを無私と呼んだ。彼等はこ

れまで彼等自らの收穫してゐた自分自身の利益の上にあまりに堅く目をそそいでゐた――隣人の情況がその結果として自分自身のだけそれだけ變化しなかつたと云ふことより以上に、その隣人のやり方について何物かを見るべく。彼はむしろ同じ物としてとどまつてゐた。そして彼が利益を眼中に置いてゐなかつたかのやうに見えた。始めて人々は自らに言つた、無私が一の德であると。勿論小さな私の事柄に於て、屢々彼等に同じ事物が起つたかも知れない。けれども人々は、この德が社會全體に讀み得られるやうな、大きな文字で以てはじめて壁の上に畫かれたときにのみ、この德を目にとめた。道德上の性質が、德として認められ、名稱を與へられ、尊重され、獲得をすすめられるのは、それが社會全體の幸福や運命について目に見えるやうな決定を與へた瞬間からのことである。けだしそのとき、感情の高さや、內的の創造的の力の興奮が多くの人々に於てまことに大きいので、この性質にまでささげ物が齎らされる――各人の有する最も善き物からのささげ物が。乃ち眞面目な者はその足下へ彼の眞面目を置き、品位ある者は彼の品位を置き、婦人はその溫良を置き、青年はその性質の中のあらゆる希望と將來とに充ちたものを置く。詩人はそれに言葉と名稱とを貸し與へ、同じ存在の輪舞にそれを加へ、それに一の系譜を與へ、遂には藝術家等がなすごとく、彼の想像の畫圖を新しき神性として禮拜する。彼は他人に禮拜することをすら敎へる。かくて結局、普遍的の愛及び感謝の共働を以て、一の德が一の影像のごとく、善良であり名譽あるものであるところのすべての物の貯藏所になり、一種の殿堂と神的な人物とになる。それはそののち個的の德として、それまで德でなかつたところの絕對的實在として現れ、また神聖にされたる超人間性の權利と權力とを行ふ。希臘の晩年に於ては、諸の都市はかくのごとき神化された人間的抽象（この變な概念にこの變言葉を用ひることを許されるならば）に充ちみちてゐた。國民はその一流の仕方に於て、その地上に一のプラトオ的な『觀念の天國』を建ててゐた。そして私は、その居住者が古きホメエル的な神的存在のどれよりも、より少く生きいきと感じられたことを思はないのである。

一九一

暗黑時。――『暗黑時』は諸威に於て、太陽が終日地平線の下にとどまつてゐるやうな時期に與へられる稱呼である。その時分溫度は絕えず徐々に下つて行く。人間的將來の太陽が一時消えてしまつてゐるやうなすべての思想家等にとつて、好個の比喩である。

一九二

贅澤の哲學。――一の小園と、無花果と、少しばかりのチイズと、それに三四の友人と――これがエピクウルの贅澤であつた。

一九三

生涯の諸の時期。――生涯に於ける本當の時期は、主宰的な思想或は感情の起伏の間に介在する、それらの短き停止の時である。ここにはまた飽滿がある。そのほかはすべて飢渴である――或は過飽である。

一九四

夢。――我々の夢は、苟くもそれがうまく行つて完成したならば――通例夢はへぼに出來た作品である――說話的な詩語の代りに光景と寫象の象徵的連鎖である。それらのものは詩的な大膽と分明とを以て、我々の經驗を、或は期待を、或は關係を意譯するので、我々は朝になつていつも、我々が我我の夢を想ひ出すとき我々自らを不思議に思ふほどである。我々は夢に於て、あまりに多くの藝術的なものを浪費する。そして、それ故晝間は往々藝術的なものに於てあまりに貧しいのである。

一九五

自然と科學。――丁度自然に於けるごとく科學に於ても、より惡しき、より不毛な地方が先づ開拓される。なぜならば、科學がその初步に於て自由にするところの手段が、その目的に對してまづ十分であるからだ。最も豐饒なる土地の仕事は、注意深く發展された、大仕掛な方法を要し、しつかり摑んだ個々の成果を要し、また善く訓練された勞働者の有機的集團を要する。すべての斯うしたものはいづれもずつとのちになつてはじめて見出される。氣短かや功名心は往々あまりに早く此等の最も豐饒なる地方へ手をのばす。しかしながら結果はそのときからつぼである。自然に於ては此の如き損失は殖民者の飢餓といふことによつて復讐される。

一九六

單純に生活する。――單純な生活のしかたは今日困難である。それは甚だ利巧な人々すらがもつてゐるよりも、ずつとより多くの省察と發明的才分とを要するのである。最も正直な人は恐らく尙ほ言ふであらう、『私はそれについて左樣に久しく省察すべく時間を有しない。單純な生活のしかたは私に

とつてあまりに高尚な目的である。私は私よりもより賢き人々がそれを發見したまで待たうと思ふ。』

一九七

尖端と小さき尖端。――乏しき豐饒や、屢々の獨身生活や、また一般に最も高き最も教養ある人々の性的冷淡は、彼等の屬する階級のそれと同じく、人類の經濟に於て切要なものである。理性は精神的發展の頂點に於て神經病的苗裔の危險が甚だ大きいと云ふことの事實を承認し且つ利用する。かくのごとき人々は人類の尖端である。彼等は此上もはや小さな尖端へかけ出して行つてはならぬ。

一九八

自然は決して跳躍しない。――人間がいかに強く向上し、一の反對から他の反對へ跳び込むやうに見えようとも、より精密なる觀察は、新しき建物が舊い建物から成長して來るところの握接を現し示すであらう。これが傳記家の仕事である。彼は自然が決して跳躍しないと云ふ原理に從つて、その傳記を考察しなければならぬ。

一九九

なるほど清潔ではあるが。――清潔に洗つた襤褸を着てゐる人は、なるほど清潔なものを着てはゐる。けれどもやつぱり襤褸を着てゐるのである。

二〇〇

孤獨な人は語る。――我々は多くの厭嫌や、不機嫌や、退屈――友人や、書物や、義務や、欲情のなき孤獨がかうしたすべての物を抱持しなければならないやうに――に對する報償として、自分自身及び自然との最も深き交りのそれらの少時間を收穫する。全然退屈に對して自らを防衛するところの人は、自分自身に對しても皆をきづくのだ。さう云ふ人は到底自分自身の最も内的な泉から最も力强き清涼劑を呑むことが出來ないであらう。

二〇一

間違つて有名になる。――實際にはただ智識を通じてのみ、とり分け地理學上の智識を通じてのみ

意義を有するやうな、けれどもそれ自體は審美的意義に乏しいやうな、それらの所謂自然美を私は嫌ふ——たとへばジュネエヴから見たモンブランの眺めのごときを。これは智識の頭腦的悅樂に手傳はれることなしにはつまらない物である。そこのより近き山々がずつとより美しくより表白にとんでゐる。しかしながら『全くそれほど高くない』——あの沒分曉な智識がおとしめて附け加へるごとく。ここでは目が智識に矛盾する。如何にしてそれはけに矛盾の中に悅樂し得るものぞ！

二〇二

樂みに旅行する人々。——彼等はほんやりしてゐて、汗をながしながら、禽獸のごとく山を登る。人々は、途中に美しき眺望のあることを彼等に告げるのを忘れた。

二〇三

あまりに多く、そしてあまりに少く。——人々は今日あまりに多く生き、そしてあまりに少く考へる。彼等は空腹と不消化とを同時にもつてゐる。そしていくら多く食べても、彼等はいよいよ痩せて行くばかりである。今日『私は、何物をも經驗してゐない』と云ふところの人間は、馬鹿者である。

二〇四

結末と標的と。——各の結末は標的でない。あるメロディイの結末はそれの標的でない。尙ほ且つそのメロディイがその結末に到着しないならば、それはその標的にも到着してゐない。一の比喩である。

二〇五

大なる自然の中立。——大なる自然の中立(山や、海や、森や、砂濱に於ける)は愉快にする。しかしながらただ短き時の間だけ。あとでは我々は苛だつて來る。『そもそも此等の事物は我々に何物をも言はうとしないのか？我々は彼等にとつて存在してゐないのか？』『そこには一の crimen laesae majestatis humanae(譯者註——人間に對して犯されたる尊嚴の瀆冒)といふ感情が生じて來る。

二〇六

目的を忘れる。——旅行について我々は通例その目的を忘れる。殆んど各の職分は、一の目的に對する手段として選ばれ始められる。けれども最終の目的として續けられる。目的の忘却は最も屢々な

されるところの愚鈍である。

二〇七

觀念の軌道。――一の觀念が丁度地平線上にのぼつてゐるとき、魂の溫度は通例甚だ低い。ただ次第次第にその觀念はその溫かさを加へる。そしてその觀念に對する信仰が既に再び沈んでしまつたとき最も暑いのである(換言すればそれがその最も大なる効果を及ぼすのである)。

二〇八

如何にして人はすべての者を自分のむかうへ廻すか。――今誰かが『私の味方でないものは私の敵だ』と言ふことを敢てしたならば、彼は直ちにすべての者を自分の敵にしたであらう。この感情は我我の時代にほまれを歸する。

二〇九

富を恥づる。――我々の時代はただ一種類の富者をのみ我慢する。その富を恥づるとてその富者をのみ我慢する。もしも我々が誰かについて、『彼は甚だ富んでゐる』と言はれるのを聞くならば、我々は直にかの、厭はしく膨れた病氣を、たとへば脂肪過多や水腫なぞを見た場合と同樣の感情を經驗する。我々はかくのごとき富者と、彼が嘔吐を催すやうな我々の感情について何物をも氣附かないやうに交際し得べく、骨を折つて我々の人間性を思ひ起さねばならぬ。しかしながら彼が苟くも自らその富を誇らはしく思ふや否や、我々の感情は人間的非理性のかくも高き程度に對する殆んど憐憫的な驚嘆と混じられる。乃ち我々は天の方へ手をさし上げて叫ばうとねがふ、『あはれなる、醜き、荷積まれ過ぎたる、百重にも桎梏をはめられたる者よ、各の時が何等かの不快なものを齎らす、或は齎らし得る者よ、その四肢の中に二十個の國民に各の出來事が痙攣するところの者よ、如何にして汝は、汝が汝の情況に寛ろいでゐると言ふことを我々に信ぜしめ得るのか? もしも汝が何處かに公に現れるならば、我々はそれが汝にとつてただ冷かな憎しみを、或は厚かましさを、或は無言の嘲笑をのみ有するところの全くの瞥見の間に、排列撻刑に行ふことの一種であることを知る。汝が儲けるのは他の人々が儲けるのよりも容易であるかも知れない。しかしながらそれは不用の儲けであつて、格別の悅びを招致しない。そして汝が儲けたすべてのものを保全するのは、どのみち今何等かの厄介な儲け仕事よりもより厄介な事柄である。汝は絕えず苦しんでゐる。なぜと言つて汝は絕えず失ひつつある故に。

人々が汝に常に新しき血を注射しつつあることが、汝に迄何の役に立つか？ それは汝の頸にくつつけられたる、永久にくつつけられたる吸角の痛みを減じてくれるものでない！ 併しながら公正を失はないことの爲めに言へば、金持にならないでゐるのは汝にとつて困難である、恐らくは不可能であらう。汝は保全しないでゐられない。その上にまた儲けないでゐられない。汝の性格の遺傳的傾向は汝の上にかけられたる軛である。しかしながらその故を以て我々を欺くな。そして汝のつけてゐる軛を正直に且つ目に見えるやうに恥ぢよ。げに汝は汝の心に於て、それをつけてゐることをあきあきしていやになつてゐるのである。かうした羞恥は汚辱でない。

二一〇

法外なる僭越。――ある人々は、彼が公然嘆美するところの一の偉大なものを、自分自身への階段橋梁として表現する場合のほか、賞讃することを知らないほどそれほど僭越に出來てゐる。

二一一

汚辱の地面に。――人々から一の觀念を取らうと思ふ人は、通例それを辯駁し、その中にゐる非論理的な蟲を引き出してしまふと云ふことで以つて滿足しない。むしろその蟲が殺されたあとで、彼は更に果物全體をも汚泥の中へほり込む――それを人々の目に見苦しくし、嘔吐を催すものにする爲めに。かくて彼は、その辯駁された觀念のあんなにもあり勝ちな『三日目のよみがへり』を不可能にすべき手段を見出したやうに思つてゐる。彼は間違つてゐる。なぜと云つて、丁度その汚辱の地面に、汚物の眞中に、その觀念の核心は間もなく新しき種子を生ずる。乃ち、結局とりのけてしまはうと思ふ物は、輕蔑したり唾棄したりしてはならぬ。むしろ恭しくいく度となくそれを氷の上に置くことだ――觀念が甚だ粘り强き命を有するものだと言ふことを考へて。ここに我々は次ぎの格言に從つて行動しなければならぬ。曰く、『一の辯駁は何等の辯駁でもない』。

二一二

道德の運命。――精神上束縛が弛緩したために、道德（道德的感情に從つてなす行動の、遺傳的な、傳習的な、本能的なしかた）もまたたしかに衰退してゐる。しかしながらそれは、節度とか、正義とか、安靜だとか云ふやうな個々の德について言はれない。なぜと云つて意識された精神の最も大なる自由は、いつかしら、知らず知らずにすらもそれらの德へ歸してしまふ。それからまたそれらのもの

を有用なものとして推奨する。

二一三

不信仟の狂信家と彼の擔保。——

老人。汝はすばらしきことを敢てして、大なる事物に於て人々を教育しようと思ふか？　何處に汝の擔保があるか？

ピルホオン（譯者註——希臘の哲學者）。ここにそれがある。私は私自らに對して人々に警告をして置かうと思ふ。私は私の本性のあらゆる缺點を公然と告白し、私の輕卒や、矛盾や、愚劣をすべての目の前に暴露して置かうと思ふ。『私の言ふことに耳をかすな』と私は彼等に言はうと思ふ、『私が汝等の中の最もつまらない者にひとしくなつたまでは、否更に、彼よりもつまらなくなつたまでは。苟くも汝等が能ふ限り、眞實に對して戰へ——それの代辯者である者に對する汝等の嫌惡から。私は汝等の誘惑者欺瞞者であるだらう——汝等が私に於て尊敬すべきものと品位との聊かの微光をでも認めるならば。

老人。汝はあまりに多くを約束する。汝はこの重荷に堪へきれない。

ピルホオン。それならば私は、これをも人々に言はうと思ふ、私があまりに弱いと云ふこと、そして私の約束するものを果し得ないと云ふことを。私のつまらなさが大きければ大きいほど、彼等はいよいよ眞實を信じないであらう——それが私の口を通して出るとき。

老人。汝は眞實に對する不信任を教へようとねがふのか？

ピルホオン。未だかつてこの世にあらざりしごとき不信任は、ありとあらゆるものに對する不信任は。それは眞實に到る唯一の道である。右の目は左の目を信じてはならぬ。そして光は一時の間闇と呼ばれねばならぬ。これこそ汝等が行かねばならない道である。それが汝等を果物の樹と美はしき草地とへ導くやうに思ふな。汝等はその道に小さな硬い穀粒を見出すであらう。それが眞實である。何十年の間汝等はうその幾握りかを呑み込まねばならぬ——それがうそであることを、ちやんと知つてゐながらも、飢の爲めに死なないやうに。併しながらそれらの穀粒は播かれたり植ゑられたりする。そして恐らくは、恐らくは他日收穫が來るであらう。何人も狂信家でない限り、それを約束するわけに行かない。

老人。友よ、友よ！汝の言葉もまた狂信家のそれである！

ピルホオン。汝の言ふ通りだ！私はあらゆる言葉を信じまいとする。

老人。さらば汝は沈默せねばならないだらう。

ピルホオン。私は私が沈默せねばならないこと、また人々が私の沈默に不信任であるべきことを彼等に告けるであらう。

老人。さらば汝は汝の企てから引き退くか？

ピルホオン。むしろ——汝は私が通りぬけねばならない門戸を私に示した。

老人、私は知らない——我々は今尙ほ十分に理解し合つてゐないのか？

ピルホオン。多分理解し合つてゐない。

老人。せめて汝が汝自らを十分に理解してゐるならば！

ピルホオン。（くるりとわきへ向いて笑ふ）。

老人。ああ、友よ！沈默と笑ひと——今それが汝の哲學全體であるか？

ピルホオン。それは最も惡いものでなかつたらう。

二一四

歌羅巴の書物。——モンテエヌや、ラ・ロシュフコオや、ラ・ブリュイエエルや、フォントゥネエルー特に Dialogues des morts（死人の對話）——や、ヴォオヴナルグや、シャンフォオルなどを讀む場合、我々は他の國の六人の著作家の如何なる集團を讀む場合よりも、古事物により近くなるのである。これらの六人を通じて、紀元前の終の幾世紀かの精神は再び生き返つて來る。彼等は相集まつて、文藝復興期の大なる、尙ほ繼續してゐるところの鎖に於ける重要な一鍵環を形作る。彼等の書物は國民的趣味及び哲學的色調の變化——今各の書物が有名になる爲めには、それに於て說明されるのを、說明されねばならないのを常とする——の上にあげられる。彼等は獨逸の哲學者のすべての事物を一所にしたよりも、より多くの現實的な思想を、思想を生むやうな思想を（そして私は究極の定義を與へることにまごつく）包括してゐる。ともあれ、彼等は子供等の爲めにも夢想者等の爲めにも書かず、處女等の爲めにも基督敎徒等の爲めにも書かず、獨逸人の爲めにも（再び私はこの文句の尻を結ぶことにまごつく）……の爲めにも書かなかつた著作家等であるやうに私にまで見える。しかしながら平つたく讃辭をつらねて言ふならば、彼等はもしも希臘語でかいてゐたならば、希臘人等からも理解されたであらう。これに反して、プラトオのごとき希臘人すらも、例へばゲエテだとかショオペンハウエルだとか言ふやうな我々の最も善き獨逸の思想家の述作を、そもそもどれだけ理解し得たことであらう？——彼等の書きかたが、卽ちあの晦澁や、誇張や、折々の乾燥が彼に不快を感ぜしめたと云ふことを別に

しても。右の二人は、獨逸の思想家の内にあつては最も少いながらに、尙ほ且つあまりに多く此等の缺點をもつてゐた。卽ち、ゲエテは思想家として、相當であるより以上に好んで雲を抱擁した。そしてショオペンハウエルは殆んど絕えまなく、事物その物の間をぶらつくことの代りに、事物の比喩の間をぶらついてゐる(それが罰しられずにゐない)。之に反してそれらの佛蘭西人等にあつては、如何なる明るさと優美なる際やかさとぞ！　最も耳のこまやかな希臘人共すらもこの藝術を稱揚せずにゐられなかつたであらう。そして彼等はその上に一の物を、佛蘭西人の表白のキットを嘆賞し尊敬したであらう。けだし彼等は、自らかう云つた物に於て特別に秀でることなしに、大にそれを愛してゐたのである。

二一五

流行と當世風。——尙ほ無智や、不潔や、迷信が盛に行はれてゐるところには、交通が振はず、農業が貧しく、僧侶が有力であるところには、いづこにも國民的衣裳がやはり着けられてゐる。これに反して、反對なものの徵候が見出されるところには流行が支配してゐる。乃ち流行は今日の歐羅巴の德について見出さるべきである。それは實際にそれらのものの暗面と呼ばるべきであるか？　流行的であつてもはや國民的でない男性的服裝は、それを着るところの人について揚言する——その歐羅巴人が一個人としても、ある階級並びに民族に屬する者としても注意を呼ばうと欲しないと、彼がかうした種類の虛榮心の故意的抑制を自分自身にまでの律法にしたことを。次ぎには、彼が仕事好きであり、着物をきたりおめかしをしたりすべく多くの時をもたず、加之、材料や仕立に於けるあらゆる高價なもの贅澤なものを、彼の仕事に矛盾するものとして見出すことを。最後に、彼が彼の衣裳によつて、かのより學問ありより精神的な職業を、彼が歐羅巴人として最も近く立つ、或は立ちたがるところのもののやうに指示する(今尙ほ存在するところの國民的衣裳によつて、盜賊や、牧羊者や、或は軍人が最も願はしき且つ最も著るしき職業として示されるときに)ことを。男性的流行の斯うした一般的性格の内には、年若き人々の、大都市の洒落者やのらくら者の、卽ち、歐羅巴人としてまだ熟し切らない連中の虛榮心が招致するところのそれらの小さな動搖がある。歐羅巴の婦人等はまだずつとより少く熟してゐる。從つて彼等の間に於ける動搖はずつとより大きい。彼等も國民的な衣裳をきたがらない。そして彼等の服裝によつて、獨逸人として、佛蘭西人として、露西亞人として認められることをいとふ。しかしながら彼等は、個人として人の目につくことを甚だ好ましく思ふ。次ぎにはまた何人も彼等の服裝によつて疑の中に殘されてはならぬ——彼等が社會のより立派な階級に(「善き」、

或は『高き』、或は『大なる』『世界』に)屬してゐるといふことについて。そして此點に關して云へば、彼等は辛うじてその階級に屬してゐるならば、或は全くその階級に屬してゐないならば、彼等はいよいよその見得をはることにつとめたであらう。別して年若き婦人は、年上の者の着るところの何物をも着ようと欲しない。なぜならば彼女が年を多く見られることによつて市價を落すやうに思つてゐるからだ。より年をとつた婦人はまたより若々しき衣裳によつて、出來るだけ久しく世間を欺かうとするであらう。かうした競爭から絶えず一時的の流行が起らねばならぬ。そしてそれに於ては、本當に若々しきものは全く明白に且つ模倣しがたく目に見える。しかしながらその年若き女性藝術家の發明的精神が一時の間若々しさのかくのごとき發露に於て耽つたならば、或は(全體の眞理を言ふならば)より年の行つた慇懃なる文化の並びに尙ほ存在してゐるところの國民の、また一般に衣裳の世界全體の發明的精神が助言を强ひられたならば、そしてたとへば西班牙人や、土耳古人や、古代希臘人などを一まとめにして、美しき肉の美化の爲めに桎梏をかけられたならば、則ち、彼等は遂にいつもいつも發見する——彼等が彼等の判斷に於て最も善き理解を示してゐなかつたことを。男子等の上に影響を及ぼすべく、美しき肉體を以てするかくれんぼが、赤裸々の、並びに半裸體の正直よりも、有利であると云ふことを。そして今趣味と虛榮心との車輪は今一度反對の方向へ廻轉する。やや年の行つた若い婦人等は、彼女等の王國が來たことを見出す。そして最も愛らしき者と最も沒條理な者との競爭はまたもや新奇にまき直しをやる。しかしながら婦人等が內面的に進步し、もはや彼等自らの間に、これまでのごとく、未熟の年配にまで優勝を容認しなくなればなるほど、彼等の衣裳についてのかうした動搖はいよいよ小さくなり、彼等の修飾はいよいよ單純になる。これに付いての正しき判斷は古代の模範に從つて下されてはならぬ。乃ち地中海岸に住んでゐる女等の服裝の標準に從つて下されてはならぬ。むしろ中央及び北方歐羅巴——けだしそこでは今歐羅巴の理智的及び創造的精神がその最愛の鄕土をもつてゐる——の風土的條件を顧慮しなければならぬ。されば一般に、流行と當世風との特色的徵證は變化でない(なぜと云つて變化はあるあともどりであり、尙ほ未熟な男性的並びに女性的歐羅巴人をしるし付けるから)。むしろ國民的、社會的、並びに個人的虛榮心の棄絕である。それ故にそれは賞讃すべきである。なぜならばそれが力と力とを節約してくれるから——歐羅巴のある都市及び地方が着物の事に付いてほかのすべての者共の爲めに思考したり發見したりしてくれるならば(形式の感じが各の人に賦與されてなかつたと言ふ事實を考へる場合)。それもまた實際に何等のあまりに度を過ごしたる功名心でもない——例へば巴里がそれらの動搖の尙ほ存する限り、此世界に於ける唯一の發明者革新者であるべく要求すると言ふのは。ある獨逸人がある佛蘭西の都市のこれらの要求に對する憎

惡から、異つた着物のきかたをしようと――例へばアルブレヒト・デュウレルの樣式に於けるがごとく――ねがふならば、則ち彼をして考量せしめよ、彼はそのときむかしの獨逸人が着たところの、しかしながら一向獨逸人が發明したのでないところの服裝をしてゐるのだと言ふことを。けだし、獨逸人を獨逸人として特色づけたところの服裝はかつてないのである。加之、彼をして觀察せしめよ、如何に彼がさうした服裝に於て見えるかを、また、この十九世紀が刻んだあらゆる彼の輪廓や皺をもつて、彼のすつかり近代的な頭が、デュウレル風な着つけに反抗をしないかどうかと言ふことを。『當世風』と『歐羅巴風』と言ふ二の概念が殆んど一になつてゐる此處に、我々は歐羅巴と言ふ言葉の下に、地理上の歐羅巴が、あの小さな亞細亞の半島が包容するよりも、ずつとよりひろき地域を意味する。とり分け我々は、亞米利加が我々の文明の娘である限り、亞米利加をも加へて置かなければならぬ。一方では必ずしも歐羅巴全體が『歐羅巴』と言ふ文明概念の内に入らない。むしろ唯だ、希臘主義や、羅馬主義や、猶太主義や、基督教にその共通の過去を有する、それらのすべての國民と國民の部分とだけが入るのである。

二一六

『獨逸風の德』。――前の世紀の初めから道德的覺醒の一潮流が歐羅巴を流れ渡つたのは、否定することの出來ない事實である。そのときはじめて德は再び雄辯になつた。彼女は興奮や感動の拘束なき身振りを見出すことを學んだ。彼女はもはや彼女自身を恥ぢなかつた。そして自分自身を立派にする爲めに哲學や詩を工夫した。我々がかうした潮流の源をさがし求めるならば、我々はルッソオを見出す。しかしながら神話的なルッソオを、彼の述作（人は殆んどまた言ひ得た、彼の神話的に解釋された る述作と）の印象によつて、竝びに彼自らの與へたる手語によつて作り上げられたる幻を見出す。彼及び彼の公衆は絶えずこの理想的風貌を作り上げることに働いた。今一の本源はストイッシュに偉大なる羅馬主義のあの復活――それによつて佛蘭西人等は復興期の仕事を最も立派に進行さした――の中に横つてゐる。彼等はめざましき成功を以て古代的形式の複製から古代的性格の複製にまで移つて行つた。かくて彼等はつねに最高の名譽に對する權利を保留される――これまで近代の人類に最善の書物と最善の人間とを與へてゐたところの國民として。かうした二重の原型が、神話的ルッソオのそれとあの羅馬の復活したる精神のそれとが、如何により弱き隣人に影響したかは、とり分け獨逸に於て見られる。獨逸は意欲及び自利の嚴肅と偉大とへのその新しき全くめづらしき高翔のために、結局彼自らの新しき德に對して驚くやうになつた。そして『獨逸風の德』と云ふ概念を世界へなげた――あだか

もそこにはこれより本源的な、傳來的な何物もあり得なかつたかのごとく。道義的意欲の偉大と意識性とに對するあの佛蘭西的な衝動を、自分自身へ移したところの第一の偉大なる人々は、より正直であつた。そして恩義を忘れなかつた。カントの道德主義は——あれはどこから來るか？　彼は始終我々に思ひ起させる。ルッソオから竝びにストイックの羅馬の復活からと。シラアの道德主義も同じ根源をもつてゐる。根源の同じ美化をもつてゐる。音調に於けるベエトオヱンの道德主義は、ルッソオや古代佛蘭西人や、シラアの讃美歌である。『獨逸青年』は第一にその謝恩を忘れた。なぜならばその間人々が佛蘭西嫌ひの說教に耳をかしてゐたから。その獨逸の青年は一般に青年共に許されるよりも、より多くの意識を以て前景へのり出して來た。彼が彼の父性を吟味して見たならば、彼は當然シラアとフィヒテと、シュライエルマッヒェルとの近似を考へたことであらう。しかしながら彼はその祖父等を巴里に、ジュネエヴにさがさねばならなかつたであらう。そして彼が信じたところのもの、卽ち、あの德が三十歲よりふるくないと言ふことを信ずるのは、甚だ近視眼的なことだつた。そのとき人々は、『獨逸風の』と言ふ言葉によつて德もまたそれと共に理解されることを要求するに慣れた。そして今日に至るまで、それはまだ全然忘れられてゐない。更に觀察せよ、かの上述の道德的覺醒が道德的現象の認識に對して、殆んど自から明らかなるごとく、ただ損害と背進的運動とをのみ結果にもつと言ふことを。カントから出立したところの、あらゆるその佛蘭西の、英吉利の、竝びに伊太利の支脈や副產物をもつた、獨逸の哲學全體は何であるか？　エルヱシュウスに對する一の半神學的な攻擊である。彼が結局うまく表白し一括したところの正しき道の、久しく骨折つて獲得されたる眺望及び手語の拒斥である。今日に至るまでエルヱシュウスは獨逸に於て、あらゆる善き道德家及び善き人の中最も凌辱された者である。

二一七

クラシックと浪漫的。——クラシックな心をもつた精神も、浪漫的な心をもつた精神も——かうした二通りの精神がつねにあるごとく——將來に對する一の幻影をもつてゐる。しかしながら前者はその幻影を、彼等の時の强さから引き出し、後者はその弱さから引き出すのである。

二一八

教師としての器械。——器械はそれ自からによつて、人間の集團の鳩尾的共働——各人がただ一の年をなさねばならぬやうな活動に際して——を敎へる。器械は黨派體制の、また戰爭の模範を與へる。一方ではそれは個人的自己讃頌を敎へない。なぜと言つてそれは、多くの者からして一の器械を作る

のであり、各個人からは一の目的に對する一の道具を作るのであるから。それの最も普遍的な効果は、集中の利便を致へるにある。

二一九

定住的でない。――人は好んで小さな町に住む。しかしながら折々、丁度その小さな町が我々を最も寂寥なる最も赤裸々なる自然へ逐ひ立てる――とり分け、我々がそれをあまりによく見ぬいてゐると思ふとき。結局我々は、この自然から我々自らを保養する爲めに、大きな都市へやつて來る。それから二三杯で、我々はその杯の滓を忖度する。そして圓環は、小さな町を發端にして再びはじまる。かくの如く近代人等は生きてゐる。彼等はすべての事物に於て、他の時代の人々と同じく定住的であるべく、ややあまりに徹底しすぎてゐる。

二二〇

器械文明に對する反動。――それ自ら、最も高き思考力の產物であるところの器械は、それに奉仕する人々によつて、殆んどただ低級の思想なき力をのみ動かすのである。成程器械はその場合、でなければ眠つたままでゐるべき力の限りなき量を釋放する。しかしながら、より高く登るべき、より善くすべき、藝術的になるべき衝動を分たない。それは活動的にし單調にする。けれども、長い間にはこれが反對の効果を生ずる。器械を通じて變化にとんだ閑散を熱望することを學んだところの、魂の絕望したる倦怠を生ずる。

二二一

啓蒙の危險。――半ば狂亂した、劇的な、禽獸的に殘忍な、淫縱な、とり分けセンティメンタルにして自己陶醉的なすべてのもの（それは相集まつて眞に革命的な本質を成し、また革命前ルッソオに於て肉體となり精神となつた）は、かうしたものの全體はうその熱狂を以て、啓蒙をさへも狂信的な頭（それはその啓蒙によつてそれ自ら、赫々たる光榮に圍繞されてゐるごとく輝きはじめた）の上に置いた。しかし啓蒙は實際さうしたものにまで緣がない。そして打つちやつて置かれるならば、靜かに光線のごとく雲を刺し貫いたであらう――ただ個々の者等をのみ改造することに久しい間滿足して、またかくしてただ甚だ徐ろにのみ國民的の習風や制度をも改造しながら。しかししながら今、激烈にして突然なる物に束縛されて、啓蒙その物も激烈にして突然になつた。それの危險はその爲め解放及

び照耀の有用なる性質（それが大なる革命にまで引き入れたところの）よりも、殆んどより大きいものになつてゐる。誰でもこれを理解するところの者はまた、如何なる混淆からそれが引き出さるべきかを、如何なる不潔から清められるべきかをも知るであらう――それが自分自身で、啓蒙の仕事を繼續し、且つ革命をその芽生の中に摘みとりその効果をなくしてしまひ得ることの爲め。

二二二

中世に於ける欲情。――中世は最も大なる欲情の時代である。古代も我々の時代もかうした魂の擴がりを有しない。魂の廣さは却つてより大きくなかつた。そしてより大きい尺度をもつて測られたともない。野蠻民族の肉體的原始性と、基督教的神祕家の魂のありすぎる、さえすぎてゐる、あまりに餓かしき目と、最も子供らしきもの、最も年若きものと、最も熟しすぎたもの、最も年齢につかれたものと、肉食獸の粗暴と近古の精神の柔弱文弱と、すべてのかうしたものはその時分一人の人間に於て屢〻一に合してゐた。かくのごとく、ある一人が一の欲情に陷つたならば、奔流の速さはより大きくあらねばならず、渦卷はより混雜したものであらねばならず、倒壞はより深くあらねばならなかつた――これまでよりも。我々近代人は、我々がここになしたところの損失に對し、滿足に感ずることが出來るのである。

二二三

奪ふと貯へると。――よつて以て、大なる者が奪ふべく、小さなる者が貯へるべく希望し得るところの、すべての精神的運動はたしかに盛になつて行く。さればこそ、例へば獨逸の宗教改革のごときが盛んになつて行つたのである。

二二四

悅ばしげな魂。――飲酒や、酩酊について、惡臭を放つやうな不潔について、ただ遠くから目示せされた丈けでも、ふるき獨逸人の魂は悅ばしげになつた。でなければ彼等は壓迫されてゐる。しかしながらそこに彼等は、彼等が本當の理解したものを見出した。

二二五

淫蕩なるアテン人共。――アテンの魚市場がその思想家や詩人を獲たときすらも、尙ほ且つ希臘の

淫蕩は、かつて羅馬の若しくは獨逸の淫蕩がもつたよりもより牧歌的のより上品なる外觀をもつてゐた。ユゼナアルの聲はそこに空洞の喇叭のごとく響いたであらう。そして善良なる、また殆んど子供のやうな笑がそれに答へたであらう。

二二六

希臘人の怜悧。――勝利や卓越に對する欲求は人間性情の打ち克ちがたき一傾向であり、そして平等のあらゆる尊敬や悅びよりも、より古くより原始的である故に、希臘の國家は體操や藝術の上の競技を平等なものの内に認可した。乃ちそれは、かうした衝動が政治上秩序を危ふくすることなしに自らを漏らし得べきところの、一の競技場を限つたのである。體操や藝術の上の競技の究竟的衰亡と共に、希臘の國家は内的の不案と解體とに陷つた。

二二七

『永久のエピクウル。』――エピクウルはすべての時代に生きてゐた。今尙ほ生きてゐる。エピクウル派と自ら稱したところの、今尙ほ稱してゐるところの人々にまで知られずに、そして哲學者の間に一向に名聲を博することなしに彼自らも自分の名を呼び忘れてゐた。それは彼が投げ出したところの、最も重つ苦しき行李であつた。

二二八

優越の樣式。――學生語は、獨逸の大學生の言葉遣ひは、勉强をしない學生共の間に其起源をもつてゐる。彼等は彼のより眞面目なる連中に對して一種の優勝を獲得する事を知つてゐる――教養や、端正や、學殖や、秩序や、節制に於て凡ての茶番じみたものを暴露する事、又それらの領域からの言葉を絕えず、より善き、より學殖ある學生共と同樣、(乍併目に、それに伴ふしかみつつらに一の意地惡さを以て)口にする事によつて。優越のかうした言葉――獨逸に於て獨創的である唯一のもの――に於て、今や政治家や新聞批評家なぞも又知らず知らず語つてゐる。それは間斷なき反語的な引用である。落着のない、爭ひの好きな横目遣ひである。引用記號の、しかみつつらの獨逸語である。

二二九

蟄居。――我々は人を離れたところへ引退する。しかしながら、現在の政治上社會上事情が我々の

意に滿たなかつたかのごとく、何等かの個人的不平からの引退でない。むしろ、我々が我々の引退によつて、他日文化の必要とすべき力を節約し結集しようと思ふ故、愈々この現在はこの現在であり、さう言ふものとしてその任務を盡すのである。我々は一の資本を作り、それを安全にしようと試みる。しかしながら全く危險なる時代に於てのごとく、我々がそれを埋沒して置くといふことによつて。

二三〇

精神の專制君主。――我々の時代にあつては、テオフスラトやモリエエルが作中の人物のごとく、左樣に徹底してある道德的傾向を表白したところの各の者は、病的だと思はれ、『固定觀念』をもつてゐると言はれるであらう。三世紀のアテンは、もしも我々がそこへ訪問をなし得たならば、愚人に住まはれて見えたであらう。今日では觀念の民主政が各の頭の中に勢を得てゐる。多くを集めたのが君主である。君主にならうとねがつた單一な觀念は、今日では上述のごとく『固定觀念』と言はれる。これは專制君主を殺す我々のやりかたである。我々は癲狂院を指敎ひする。

二三一

最も危險なる移住。――露西亞には聰慧の移住がある。人々は善き書物を讀んだり書いたりする爲めに、國境を越える。しかしながらかくして彼等は精神に見棄てられたる祖國をいよいよ、大きくあけた亞細亞の口――それが小さな歐羅巴を呑み盡さうとしてゐる――にしてしまふべくはたらいてゐるのである。

二三二

政治的愚人。――王に對する殆んど宗敎的な愛情は、希臘人によつて Polis（都市、都市的國家）の上へ移された――王政が廢止されてしまつたとき。一の觀念は一人の人間よりもより多くの愛に堪へる故、またとくに愛された人間がなすほど左樣に屢々、愛するものの氣に逆はない故（けだし人々が愛されてゐることを知れば知るほど、大抵の場合彼等はいよいよ顧慮をしなくなり、遂にはもはやその愛を値しなくなり、そして實際に一の間隙を生ずるのである）、都市や都市的國家に對する尊敬は、これまでの君主に對する尊敬なぞよりも大きかつた。希臘人は古代歷史に於ける政治的愚人である――より新しき歷史に於ては他の國民がそれである。

二三三

目の閑却に對して。——『タイムス』を讀むところの英吉利の教養ある階級に於て、十年毎に視力の減退が見出され得なたつたか？

二三四

大なる事業と大なる信仰。——ある人は大なる事業をもつてゐた。しかしながら彼の仲間はこの事業に對する大なる信仰をもつてゐた。彼等は分ちがたかつた。しかしながら明らかに前者は全然後者に倚頼してゐた。

二三五

社交的な人。——『私は自分ひとりでやつて行けない』と或る人は、社會好きな彼の性質を説明して言つた。『社會の胃腑は私のよりも強い。それは私にも堪へる。』

二三六

精神の瞑目。——我々が我々の行爲について反省することに習はせられ、慣らされてゐるとても、尙ほ且つ我々は行爲その物をなすに當つては心の目を閉ぢなければならぬ（これがただ手紙をかくとか、飲み食ひをするとか云ふ位の事であるにもせよ）。平凡な人々との會話に於てすらも、我々は閉ぢられたる思想家の目を以て思考することを知らなければならぬ——乃ち平凡な思考を獲得し捕捉する爲めに。かうした瞑目は意識的の、そして意志をもつて成しとげらるべき行爲である。

二三七

最も恐ろしき復讐。——もしも我々が一人の敵手に徹底的な復讐をしようと思ふならば、我々は我の手が眞實と正義とで一杯になり、それを彼に對して使用し得るまで、冷靜に待つてゐなければならぬ。乃ち、復讐を行ふのは正義を行ふのと一であり得る。それは最も恐ろしき種類の復讐である。なぜと云つてそれは、更に控訴され得べき何等の法廷をもそれ自らの上に有しないからである。かくのごとくヴォルテエルはビロンに復讐した——彼の生活や、述作や、意欲の全體をさばくところの五行

をもつて。その一々の言葉が一の眞理である。かくのごとく彼はまたフイリイドリッヒ大王に復讐した（フェルネエから彼にあてて書き送つた一通の手紙に於て。）

二三八

贅澤稅。――我々は店で必要なもの切迫した物を買ふ。そして高い價を拂はなければならぬ。なぜならば我々は、同じくまた賣物になつてゐるけれど、ただ希にのみその顧客を有するやうなものに對しても卽ち贅澤品に對しても拂つてゐるわけだから。かくのごとく贅澤は、贅澤なしにやつて行く質素な人間にも、絕えず稅を課してゐるのである。

二三九

何故に乞食はやはり生きてゐる。――もしもすべての施しがただ憐憫からのみなされたならば、乞食等は殘らず飢ゑ死にしてゐたであらう。

二四〇

何故に乞食はやはり生きてゐる。――施しをする人の最も大なるものは臆病である。

二四一

如何に思想家は對話を用ひるか。――傾聽者であることなしに、我々は多くを聞くことが出來る――善く見るべく、しかしながら折々自分自身を目にはひらなくすべく心得てゐるならば。ところで人々は對話を用ひることを知らない。彼等はずつとあまりに多くの注意を、彼等が言つたり答へたりしようと思ふところのものに對して浪費する。だが本當の聽きては屢々豫備的に答へ、また何事かを禮儀を拂ふ爲めとして言ふに滿足する。そして一方では、彼の待伏せするところの記憶をもつて、他人の言ひ現はしたすべての物を、彼がそれを言ひ現はしたときの調子や身振りとともに持つて行つてしまふ。通例の對話に於て、各人は自らを指導者であるやうに思ふ――相竝んで進んで居り、折々小さな突きを與へ合ふところの二の船の、双方ともに、他の船があとからついて來るやうに、加之引つぱられて來るやうに思つてゐる如く。

二四二

自分自身の辯解をする術。――もし誰かが我々の前に自分自身の辯解をするならば、彼はそれを甚だうまくやらなければならぬ。でなければ我々はややもすれば我々自らを責任ある者として感ずるやうになる。そして不快な感じを抱くやうになるのである。

二四三

不可能の交際。――汝の思想の船はあまりに深く行く――汝がそれで以て此等の親しき、品よき、深切な人々の大水を渡ることの出來るため。そこにはあまりに多く淺瀬があり洲がある。汝は廻つたり引き返したりしなければならず、そしてつねに途方にくれてゐるであらう。そして彼等もやがてまた途方にくれるやうになるであらう――彼等が原因を忖度し得ないところの汝の當惑について。

二四四

狐の狐。――本當の狐は、ただに彼の手をとどかせ得ない葡萄の實を酸ぱいと言ふだけでなく、また彼が手をとどかせた、そして他人から奪つたところのものをも酸ぱいと言ふ。

二四五

親密な交際に於て。――如何に人々が密接になつてゐようとも、尙ほ且つ彼等の地平線の内には天の四の方向がすべてある。そして折々彼等はこの事實に氣付くのである。

二四六

嫌惡の沈默。――見よ、或る者は思想家として人間として、深刻な、痛ましき變化を經驗する。そしてそれについて公然と證據立てる。さて聞く者は何物をも見ない！　彼がやつぱり以前と同じであるやうに思つてゐる！　かうした尋常の經驗は已に多くの著作家をいやにならした。彼等は人間の精神性をあまりに高く買つてゐた。そして彼等がその誤謬を認めたや否や沈默してしまふことを自ら誓つた。

二四七

職業的の眞面目さ。――多くの富有にして高名なる人々の職業は、あまりに久しき、習慣になつてしまつた閑散からの彼等の休息のしかたである。されば彼等はそのとき、他の人々が彼等の希なる保

養と娯樂とに於て爲すだけ、それだけ眞面目に熱心に爲すのである。

二四八

目の二重感覺。——丁度大水が汝の足下にまで突然の鱗狀の小波をよこすごとく、人間の目にもかくのごとき突然の不確實と不分明とがある。それらのものは人をして問はしめる、それは戰慄であるか？　それは微笑であるか？　それはそのいづれでもあるか？

二四九

積極的と消極的と。——この思想家は彼を辯駁すべき何人をも要しない。彼は自らそれを爲すに足つてゐる。

二五〇

空虛な網の復讐。——骨の折れる晝間の仕事のあと夕方に空つぽの網をさげて家へ歸つて來る、あの漁人のにがにがしき感情をもつところのすべての人々に、何よりも先づ氣をつけなければならぬ。

二五一

權利を承認しないこと。——權力を行ふのは骨の折れることであり、また勇氣を要求する。さればさやうに多くの人々は、彼等の善き、最高の權利を承認しない。なぜと言つてこの權利は一種の權力であるけれども、彼等はそれを行ふべくあまりに無精であり、或はあまりに臆病であるからだ。寬宏と忍耐とはかうした缺點を蔽ふところの德の稱呼である。

二五二

光を持てる者。——社會には如何なる日光もないであらう——もしもそれを生れたる詔諛者（私は所謂愛すべき人々をさしてゐる）等が持ち込んで來なかつたならば。

二五三

如何なるとき最も慈仁なりや。——人が大に尊敬されてゐて、しかも少しく食べてゐたとき、彼は最も慈仁である。

二五四

光へ。——人々はより善く見る爲めにでなく、むしろより善く輝く爲めに、光へ押しよせる。我々の輝くとき、我々はその前にゐる者が光と呼ばれるのをよろこんで許すのである。

二五五

ヒポコンデル患者。——ヒポコンデル患者は、彼の哀みや、彼の損失や、彼の缺點を容易ならぬ事としてとるべく、丁度十分なる精神と、精神の上の悅びとを所有するところの人間である。しかしながら、彼が自らを養ふところの領域はあまりに小さい。彼はずんずんと草を食べて行くので、遂には一本一本の幹を探さなければならぬやうになる。かくて彼は遂に羨望者吝嗇家になる——そしてそのときにのみ彼は堪へがたき者になるのである。

二五六

償還。——ヘシオッドは我々を助けてくれたところの隣人に、十分に報い返すべく、尙ほ出來るならばより十分に報い返すべく——我々がその力をもつや否や——我々に勸告する。けだしそれによつて隣人はその悅びをもつ。なぜと云つて彼の從前の深切が彼に利息をもたらすからである。しかしながら報い返すところの者もまた彼の悅びをもつ——彼が得たよりも少しくより多くを與へることによつて、助けられねばならないと云ふ、小さな從前の屈辱を贖ふ限りに於て。

二五七

必要であるより以上に精かで。——どれだけ他人が我々の弱さを知覺するかに對する我々の觀察感は、他人の弱さに對する我々の觀察感よりもずつとより精かである。その結果、初めの感覺は必要であるより以上に精かである。

二五八

輝かしき影の一種。——全く夜のやうな人間に密接して、殆んどいつでも（あだかも彼に結びつけられたかのごとく）一の輝かしき魂がある。それは謂はば、前者が投げるところの消極的な影である。

二五九

復讐しないか？——復讐には左樣に多くの精やかな種類があるので、復讐すべき場合をもつたところの人間は、實際に於て、彼の欲するところを行ふことも、行はずにゐることも出來る。兎もあれ世界全體はしばらくののち、彼が復讐したと云ふことに一致するであらう。されば復讐せずにゐると云ふのは、辛うじて人力の及ぶところである。彼は彼が意欲しないと云ふことをすら言ひ現はすことが出來なかつた。なぜならば復讐の輕蔑は崇高な、甚だ微妙な復讐として解釋され感得されるからである。その結果、我々は何等の不用な事をしてはならぬ。

二六〇

敬服してゐる人々の誤謬。——各の者はある思想家に何等か敬服的な愉快な事を言つてゐるやうに思ふ——いかに彼自からが丁度同じ思想に思ひあたり、また同じ表白にすらも思ひあたつてゐたかを、その思想家に示すとき。しかしながら思想家はかくのごとき報告によつて滅多に悅ばされない。否むしろ、屢々彼の思想やその表白に對して疑をさしはさむやうになつて來る。彼はひそかに、いつか双

方を訂正しようと決心する。もしも我々が誰かに敬意を拂はうと思ふならば、我々は我々の同意を表白することを警戒しなければならぬ。それは我々を同じレヴェルに置いてしまふからである。多くの場合に於てそは社交上機巧の事項に屬する——一の意見が我々の意見でなかつたかのごとく、否我々の地平線を越えてむかうへ行つたかのごとく、それに傾聽すると云ふのは。例へばある老人が、あとにもさきにもただ一度、彼の獲得した智識の庫を開くと云ふときなぞ。

二六一

手紙。——手紙は前以て通告されなかつた訪問であり、郵便脚夫は無作法な襲擊の仲介者である。我々は毎週一時間だけ手紙を受取るのにあて、そのあとでお湯に入らなければならなかつた。

二六二

先入見をもつたもの。——或る人が言つた、私は子供の時分から私自身に對して先入見をもつてゐる。されば私は各の非難に於て何等かの眞實を見出し、各の讃美に於て何等かの愚劣を見出す。讃美は通例私からあまりに低く、非難はあまりに高く評價されるのである。

二六三

平等への道。——二三時間の山登りは無賴漢と聖徒とからかなり平等な二の生きものを作り上げる。疲勞は平等と同胞主義とへの最も近い道である。そして最後に自由な眠によつて賦與される。

二六四

誹毀。——もしも我々が一の本當に耻づべき非難の由つて來るところを跡づけて見るならば、我々はその根源を決して我々の正直にして且つ純樸なる敵に於てさがさないであらう。なぜと云つて、もし彼等が我々について左樣の事を發明したならば、彼等は我々の敵であるところから何等の信仰をも見出さないであらう。しかしながら、我々が一時最も有用であつたところの、けれども何等かの理由で、もはや我々から何物をも得ないことをひそかに信じられるところの人々は、かくのごとき人々は、不名譽の球を轉がしはじめることが出來る。彼等は信仰を見出す。第一になぜならば、彼等は彼等自らに損害を來すかも知れないやうな何物をも發明しないだらうと推定されてゐるからである。第二になぜならば、彼等はより近く我々を知つてゐたからである。慰藉としてそんなにひどく誹毀された者は自分自らに言ふかも分らない——誹毀は汝の體に出て來るところの他人の病氣である。それは社會が一の(道德的)有機體である(されば汝は他人にまで有用なるべき治療法を汝自らにまで敎へ得るのである)ことを證據立てる。

二六五

子供の天國。——子供の幸福は希臘人の物語にある極北の民の幸福だけ丁度それだけ神話的なものである。希臘人の考へたところによれば、そもそも幸福が地球の上にあるならば、それはたしかに我我からあり得る限り遠く、地球の端にでもあつたにちがひない。年をとつた人々も同じやうに考へる。乃ち、そもそも人間が幸福であり得るならば、彼はたしかに我々の年齡からあり得る限り遠く、人生の境目に於て、發端に於て幸福であらねばならぬと。多くの人々にとつては、子供の外觀はかうした神話のエエルを通じて、彼の感じ得べき最大の幸福なのである。彼は彼自ら天國の前庭にはひつて來て言ふ、『幼兒共を我に來らしめよ。天國は彼等のものなれば』と。幼兒の天國の神話は到る處に、何等かの効果を及ぼしてゐる——近世の世界に於て何等かの感傷性が存在する處には。

二六六

苛立たしきもの共。——丁度出來上りつつある者は出來上りつつある物を欲しない。彼はそれに對してあまりに苛立たしい。青年は長き研究や、苦惱や、難澁ののち、人間及び事物の彼の畫が完成されるまで待たうとしない。そこで彼は、ちやんと手近に立つてゐるところの、そして彼に推奬されるところの他の畫を信任して取り上げる——あだかもそれが彼の畫の線や色を彼に與へねばならないかのごとく。彼は一の哲學者を、一人の詩人を胸に押しつける。そして今暫くの間賦役をつとめ、自分自身をすててしまはねばならぬ。彼はそれによつて多くの事を學ぶ。併しながら一人の著者は屢々、それについて最も學習認識を値するところのもの、卽ち自分自身を忘れる。彼は一生の間黨人でなくならない。嗚呼、面倒な仕事の大なる量がなされてしまはねばならぬ——汝等が汝等の色を、汝等の刷毛を、汝等の畫布を見出した前に！ そしてそのときも汝等は尙ほ人生の藝術の達人であることから遠い。しかしながら少くとも自分の仕事場に於ける親方である。

二六七

如何なる教師もなし。——思想家としては我々は、ただ自己教育についてのみ語らなければならぬ。他人によつて爲さるる青年の教育は、まだ知られない、知りがたき物の上に成される一の實驗である。或は社會の新しき各員をそのとき勢力ある習慣や風俗に從はしめる爲めの、一の徹底的な水平化である。さればどちらの場合に於ても、思想家を値しない物である。大膽な正直なある一人が Nos omnis naturels（我々の本來の敵）と呼んだところの兩親及び教師の仕事である。他日、世間の考へるごとく我々が教育されてしまつたとき、我々は我々自らを發見する。そこに思想家の任務が始まる。そのときこそは彼を助けに呼ぶべき時である——教師としてでなく、むしろ經驗を有するところの、自修した人間として。

二六八

青年との同情。——我々はある青年に夙く已に齒がなくなり、他の青年に目が見えなくなりつつあることをきくとき氣の毒に思ふ。もしも我々が彼の存在全體にかくれたるすべての呼び返しがたきもの望みなきものを知つたならば、我々の哀みは如何に大きなものであらうぞ！ 此點に於て我々は何故本當に苦むか？ なぜならばその青年は我々が企てた所のものを繼續しなければならぬ。そして彼

の力に於ける各の破碎朽廢は、彼の手に落つべき我々の事業を損ずるにちがひないからである。それは我々の不死の惡しき保證についての哀みである。或は、もしも我々が我々自らをただ人類の使命の遂行者としてのみ感ずるならば、かうした使命が我々の手よりもより弱き手に渡されねばならぬと云ふことについての哀みである。

二六九

人生の諸の時代。——一年の四季節を一生の四時代と比較するのは、尊敬すべき魯鈍である。人生の最初の二十年も、最終の二十年も一の季節に相應しない——比較に際して、我々が髪と雪との白さを以て、竝びに似たやうな色彩の類推を以て滿足しないと假定したならば。それらの最初の二十年は一般に人生に對する、全生涯に對する一の準備である。一種の長いお正月である。最終の二十年はそのときまでに經驗されたすべての物を觀望し、同化し、統一し、調和する——我々が小規模に、大晦日の晩毎にすぎた年の全體に對して爲すごとく。しかしながらその中間には全くのところ一の時期があり、季節との比較を暗示する。即ち、二十歳から五十歳に至るまでの間の時期だ（ここでは大づかみに何十年と計算したが、各の人がその經驗に準じて、自分自身のために、かの荒つぽい骨組に肉をつけねばならないのは分りきつた話である）。それらの三十年は夏と、春と、秋との、三の季節に相應する。人間の生涯は冬をもたない——我々がかの生憎と屢々はひり込んで來る、硬く、冷たく、淋しく、望みなく、結果なき病氣の時を人間の冬期と呼ばうとするにあらざれば。二十代は暑き、苦しき、荒模樣の、淫樂にふけらせる、勞らすところの年であり、我々はその晝を、それがすぎ去つた夕方に於て賞讃し、そして額の汗を拭ふ。その年の間に於ては、勞働は我々につらいけれども必要なものと思はれる、此等の二十代は人生の夏である。これに對して三十代は人生の春である——あるときはあまりに溫かく、あるときはあまりに寒く、つねに不安で、刺戟的な空氣や、むくむくと湧き出る汁液や、花盛や、到處に花の香や、多くの魅力をもつた朝や夜や、鳥の歌が我々の目をさまして、立ちむかはしてくれる仕事、心からの眞の仕事や、豫期的享樂に味を添へられたる、自分の强健の一種の享樂やをもつて。最後に四十代はすべての靜止せるものの如く神祕に、新しき風の吹きすぐる、一の高い、廣い平原に似てゐる——その上の明らかな雲なき天は、終日、また夜に入つてもつねに同じおだやかさを以て見てゐる。收穫と最も眞心のこもつた晴やかさとの時、それは人生の秋である。

今日の社會に於ける婦人の精神。――いかに婦人等が今日男子等の精神に就て考へてゐるかは、彼等の修飾の仕方に於て、彼等の顔の精神的方面を、或は彼等の個々の精神的風貌を切言することを、ちつとも考へてないといふ事實から忖度される。むしろ彼等はかくの如きものを包みかくしてゐる。そして例へば彼等の髪の毛を顔の上に整へることによつて、彼等自らに生き生きとした、熱望的な肉感性と唯物性との表白を與へることを知つてゐる――恰かも、彼等が此等の性質をただ僅かに所有してゐるに過ぎないとき。婦人等に於ける精神が男子等を恐れさすといふ彼等の信念は、彼等が最も精神的な感じの鋭さをさへよろこんで否定し、わざわざ短見の評判を自己の上に招致するほどに甚だしきものである。彼等はそれによつて、男子等をしてより多く信頼せしめるもののやうに思つてゐる。それはあだかも、人をひきつけるやうな柔らかな薄明が彼等の周圍に擴がりつつありしかのごとくである。

二七一

偉大にして果敢なき。――考察者を涙をながすほど動かすところのものは、美しき年若き妻がその良人を見るときの幸福に恍惚としてゐるところの目つきである。我々はそれに於てあらゆる秋の憂愁を感ずる――その人間的幸福の偉大について、並びにはかなさについて。

二七二

犠牲感。――多くの婦人は intelletto del sacrifizio（理智の犠牲）をもつてゐる。そしてその良人が彼女を犠牲にすまいと思ふとき、もはやその生を享有しない。彼女はそのとき彼女の悟性を以てもはや「何處へ」を知らない。そして無意識ながら犠牲の獣から犠牲の祭司そのものになる。

二七三

非女性的なもの。――『男子のごとく間抜けで』と婦人等は言ふ。『婦人のごとく臆病で』と男子等は言ふ。間抜けは婦人に於て非女性的なものである。

二七四

男性的並びに女性的氣質と死亡性。――男性が女性よりも悪しき氣質を有するのは、男の兒等が女の兒等よりも以上に於て死亡の危險にさらされてゐる――明らかに、彼等がよりたやすく『皮膚から

とび出す』からである――と云ふ事實にもとづく。彼等の荒さと堪へがたさとは、たやすくあらゆる惡しきものをして致死にまで陷らしめるのである。

二七五

巨怪なる建物の時代。――歐羅巴の民主化は抗しがたき力である。それを阻止する者すらも尙ほ且つ、民主的思想が初めに各人の手に與へたところの手段そのものを用ひる。そして此等の手段そのものを、より重寶なより有効なものにする。民主主義の最も根深き敵手(私は革命的精神を謂ふのだ)は、ただ、彼等のひき起す恐れによつて、さまざまの黨派をいよいよより速かに民主的軌道の上に押し進める爲めにのみ存在してゐるやうに見える。今我々は此將來に對して、意識的に且つ正直に働きつつある所の者共を氣の毒に思ひ得る。そこには彼等の顏に何等かの荒涼たるもの單調なるものがある。そして灰色の埃は彼等の頭腦にまで吹き渡つたかのやうに見える。それにもかかはらず、後世は他日我々の考慮を笑ふことがあり得る。そして我々が石の土手や障壁の築造に於て――必然に多くの埃を着物や顏の上にひろげ、そして避けがたく勞働者等をも多少痴愚にするところの活動に於て――見るところのものを、さまざまの民主的事業の中に見ることがあり得る。しかしながら、誰がこの故を以てかくの如き仕事のなされなかつたことを欲するであらうぞ！　思ふに歐羅巴の民主化はそれらの大なる巨大なる豫防的方策――それは近代の思想であり、そして我々はそれを以て中世に反抗して立つのである――の連鎖に於ける一節である。唯今のみが巨怪なる建物の時代である！　すべての將來がそれらの基礎の上に危險なく築かれ得ることの爲めに、それらの基礎の究極の保證！　そのあとで、文明の果樹園が再び夜通し荒く考なき山の流から破壞されるといふことの不可能が！　野蠻人に對する、疫病に對する、肉體的竝びに精神的隷從に對する石堤と障壁とが！　そして斯うしたすべての物がはじめは字義通りに荒つぽく、しかしながらだんだんといよいよより高く且つより精神的に理解されて――ここと指示されたるすべての方策が庭園術の最高藝術家の才氣ある準備全體であるべく見えるやうに。(そしてその藝術家はあの仕事が完全に遂行されるとき、そのときにのみ彼の本當の仕事に身をむけ得るのである)。勿論、我々がここに手段と目的との間に横るところの長き間隔を考へ、幾世紀の力や精神を緊張させる、大なる、至上の骨折(それは各の個々の方法を造り、或は供給するために必要である)を考へるならば、我々は現在の勞働者をあまりひどく責めてはならぬ――右の障壁や垣根が目的であり最終の標的であると彼等の聲高に揚言するとき。要するに、何人もまだ園丁や果樹(それの爲めに垣根が存在してゐるといふやうな)を見ないのである。

二七六

普通選擧の權利。――民衆は普通選擧權を自らに與へなかつた。けれども、それが今も勢力を得てゐるところでは、何處にも民衆はそれを受け入れ、一時的に採用した。しかしながら、いかなる場合にも民衆はそれを再び囘復すべき權利をもつてゐる――それが民衆の希望を滿さないならば。今日これは普遍的の事であるやうに見える。なぜと云つて投票の用ひられる何等かの場合に於て、すべての有權者の辛うじて三分の二が選擧場へ來る、否多數が恐らくは來ないとき、その事實こそ選擧制度全體に對する反對投票なのであるから。この點に於て我々は、加之、更にずつとよりきびしく批判しなければならぬ。多數者が一同の利福について最終の決定をなすべきことを定めるところの一の法律は、それによつてはじめて與へられるところの基礎の上に築かれることが出來ない。それは必然に一の更により廣きものを要する。そしてそれはすべての者の一致である。普通選擧は多數者の意志の表白であるのみならず、國全體の意志の表白でもあらねばならぬ。されば甚だ小さな少數者の反對でさへも、この制度を實行しがたきものとして押しのけてしまふのに十分である。そして投票の囘避はさながら、この投票制度全體を崩壞さすやうな反對なのである。各個人の „absolute Veto"（絶對的否認）或は――あまりに細かく刻まないで云へば――數千の否認は、正義の歸結としてこの制度の上にかぶさつて來る。それの用ひられる各の場合に於て、その制度は區劃の種類に徒つて、先づそれが尙ほ存在すべき權利をもつてゐると云ふことを證據立てなければならぬ。

二七七

間違つた結論。――我々が勝手のちがふ範圍に於て、如何に間違つた結論の引き下されることぞ！――我々が科學界の人間として隨分善き結論をなすことに慣れてゐた場合にすらも。それは耻づべきことである！そして今明かである――大なる世間の騷擾に於て、政治上の事柄に於て、殆んど毎日起るやうなすべての突然な事竝びに切迫した事に於て、かうした間違つた結論が決定せねばならないのは。なぜと云つて如何なる人も、夜の中に新しく起つて來たところのものに對しては、全く勝手が分りかねるからである。すべての政治的な仕事は、最も大なる政治家にあつてすらも、運を天に任せてのその場その場の思ひつきなのである。

二七八

器械時代の前提。――印刷や、機關や、鐵道や、電信は、何人もまだ一千年ののちの結論を抽き出すべく敢てしなかつたところの前提である。

二七九

文明の制動機。――そこに人々が生産的職業にまで時をもたないときくとき。軍隊的演習や行列が彼等の日をつぶして居り、ほかの民衆が彼等に食べさしたり着せたりせねばならず、けれども彼等の衣裳が目立たしく、時としては華かで馬鹿々々しさを極めてゐるときくとき。そこにただ少數の差別的な性質が認められ、個々のものが互に他處でよりも餘計に似て居り、或は同等のものとして取扱はれるときくとき。しかしながら理解なき服從が要求されたり與へられたりして居り、命令はされても、說得しようとは思ひ立たれないときくとき。そこには刑罰が少いけれども、その少い刑罰が嚴酷で、直ぐに最終の、最も恐ろしきものへ行つてしまふのだときくとき。そこには謀反が最も大なる犯罪と見做されて居り、惡の批評すらもただ最も大膽な者共からのみ敢てされるときくとき。そこには人間生活が安價であり、功名心が屢々生活を危險に置くといふことの形をとるときくとき。我々がすべて斯うした事をきくとき、我々は直に言ふであらう、『それは危險の中に動搖せる野蠻なる社會の畫像である』と。恐らくある者はそれに附け加へて言ふであらう、『それはスパルタの描寫である』と。しかしながら他の一人はじつと考へ込んで、そして言明するであらう――それが我々の近代的軍隊主義を描いたものである（それが我々の異つた種類の文明や社會の眞中に於て存立するごとく）――生きた時代錯誤として、前に言つた通り、危險の中に動搖してゐる野蠻な社會の畫像として、現在の車輪に對しただ一制動機の價値をのみ有ち得べき、過去の遺業として。しかしながら折々は、文明の制動機すらも甚だ必要である。云ひ換へれば、文明があまりに速く下り阪へ進みつつあるとき、あるひは恐らくこの場合に於けるごとく、上り阪へ進みつつあるときには。

二八〇

知つてゐる人々に對してより多くの敬意を。――製作及び販賣の競爭に際して、公衆はそのしやうばいの審判者にされる。併しながら公衆は何等の專門的智識を有しない。そして品物の外觀に從つて批判する。從つて外觀の（また恐らくは趣味の）技術が競爭の支配の下に增進するであらう。一方ではあらゆる產出物の性質は惡しくならなければならぬ。その結果、理性さへ價値に於て落ちない限り、いつかその競爭に一の結末がつけられ、一の新しき原理がそれに打ち克つであらう。ただ職人の親方

だけがその仕事について批判すべきであつた。そして公衆は批判者の人格に、また彼の正直に對する信仰に倚頼すべきであつた。それ故に、如何なる無名の製作もない！　少くとも一人の精通者が保證者としてそこに居り、彼の名を擔保に入れねばならなかつた――創造者の名が缺けて居り、或は聞えない場合には。ある作品の廉價といふことは素人にとつて今一の種類の外觀でありごまかしである――ただその二重性が一の品物の廉價であること、また如何ほど廉價であるかを決定するのだから。しかしながら、その二重性を批判するのは困難であり、素人にとつて全く不可能である。そこで、目の上に影響を及ぼし、あまり金のかからないものが、今日有勢になつてゐる。そしてこれは勿論器械的製作品であるであらう。再び器械は、換言すれば產出に於ける最大の速さとたやすさとの原因は、最も賣れのいい種類の品物にひいきをする。でなければそれからして目に見えるほど如何なる利得も收められないわけである。それはあまり僅かに用ひられ、あまり屢々立ちとまつてゐるであらう。しかしながら、何が最も賣れがいいかについては、前に述べたごとく公衆が決定する。それは最も交換し易きものであらねばならぬ。言ひ換へれば善く見えると共に、廉價にも見える物であらねばならぬ。かくのごとく勞作の領域に於ても我々の合言葉は次ぎのごときものでなければならぬ。曰く、「知つてゐる人々に對してより多くの敬意を！」

二八一

王者の危險――民主政はすべての暴力的手段なしに、ただ靜的に行はれたる合法的壓迫によつて、王政及び帝政を空洞にするとの力を掌中に握つてゐる――一の皆無が殘るまで（しかも恐らくは、皆無その物は何でもないけれど、正當な方面へ置かれれば、一の數の効果を十倍にもするといふやうな、各の皆無の意味を以て）。帝政王政は民主政の素樸にして合目的な衣裳に於けるきらびやかな裝飾である。民主政が自らに許すところの美しき不用物である。すべての歷史的に尊敬すべき原始的なものの名殘、否、歷史その物の象徵である。そしてこの唯一の地位に於て、ある非常に効果ある物である――もしも上述のごとくそれが自分自身の爲めにのみ立たず、むしろ正直に置かれてゐるならば。この空洞化の危險を避ける爲めには、王者等は今戰爭君主としての彼等の品位にしがみついてゐる。この目的に對して彼等は戰爭を要する。言ひ換へれば例外的な情態を要する――その情態にあつては民主主義的勢力のかの徐々たる、合法的な壓迫が弛められると云ふやうなのを。

二八二

教師は止むを得ざる災厄。――生産的な精神に飢ゑたる受容するところの精神との間に、出來るだけ少き人々をもたしめよ！　なぜと言つてその中間人物等は殆んど無意識に、彼等が供給する所の食物を悪くする。次ぎに彼等は彼等の供給に對する報酬として、自分自身にまであまりに多くを欲求する。そしてそれは獨創的な、生産的な精神から、即ち興味や、嘆賞や、時や、金や、その他の物から引き出される。されば、我々はつねに教師を、丁度商人のごとく止むを得ざる災厄と見做すべきである――我々が出來るだけ小さくすべきところの災厄として。思ふに獨逸に於ける流行の厄難はその主要の根源を、あまりに多くの者が、商賣によつて生きようと、善く生きようとねがふ（言をかへて言へば、生産者に對しては出來るだけ價格をさげ、消費者に對しては出來るだけ價格を上げ、かくして双方へ出來るだけ大なる損失を與へることによつて、自ら利しようとねがふのである）ところの事實の中にもつてゐる。同じやうに、我々はたしかに流行の精神的貧弱の主要なる根源を、教師等の過多といふことの中に見ることが出來る。教師の爲めに、左樣に僅かが學ばれ、左樣にあしく學ばれてゐるのである。

二八三

敬服稅。――我々に知られ、我々に尊敬されてゐる人間は、それが醫者であつても、藝術家であつても、乃至職人であつても、我々の爲めに何かをなし、何かを作り出してくれるものである限り、我は我々は知られざる者へ、出來るだけ低い値を拂ふ。時としては我々の財力を越えてさへも拂ふ。一方では我はそれにによろこんで我々の能ふだけ高く拂ふ。ここに各の者が、尺寸の土地の爲めに奮鬪し、人をして奮鬪せしめるところの戰ひがある。知られたる者の作品には、買ひ得られない或る物がある、我々自らの爲めに彼の作品にまで置かれたる感情や發明がある。我々は思ふ、我々の方に於ける一種の犧牲によつてより、よりよく我々の感情を表白することが出來ないと。最も大きな稅は敬服稅である。競爭が盛になればなるほど、知られざるものから買ひ、知られざるものの爲めに働けば働くほどこの稅はいよいよ低くなる――それが丁度人間の靈性上交際の高さに對する尺度であるときに。

二八四

本當の平和に到るべき方法。――如何なる政府と言へども今日は容認しない――それが折々の征服慾を滿足さす爲めに軍隊を扶持してゐるのだと言ふことを。むしろ軍隊はただ防禦の目的をのみもつてゐると言はれてゐる。正當防衛を正しいものにするところの道德は、政府の辯護者として呼び入れ

られる。しかしながらこれは我々自らに道德を、隣人に不道德を藏つて置くことを意味する。なぜならばそれは、我々の國家がどうしても正當防衛の手段を講ぜねばならぬとき、攻擊及び征服に對して熱心だと考へられねばならないからである。その上、軍隊に對する我々の需要の說明によつて（なぜならば政府は丁度我々の國家がなすごとく攻擊慾を否定する。そしてまた表面上防禦的理由からのみその軍隊を支持するからである）、我々はある人間を、——何等の戰鬪もなしに、無害にして思慮なき犧牲をあまりに好んで襲擊するところの人間を、僞善者として、狡猾な犯罪者として宣明する。かくのごとくして今日はすべての國家が相對峙してゐる。彼等は彼等の隣人の側に惡しき意向を、自分自身の側に善き意向を豫想してゐる。しかしながらこの假說は、戰爭同樣に惡しき、また戰爭以上に惡しき非人間的な考である。否、實際に於てはそれは戰爭にまでの挑發であり動機である。なぜならば、それは前に言つた通り、隣人に不道德の責を轉嫁し、かくして敵意と敵意ある行爲とを刺戟するやうに見えるからである。正當防衛の手段としての軍隊の說は、征服慾と同樣に徹底的に驅逐されなければならぬ。思ふにその內時が來たならば、戰爭や勝利によつて、軍隊的秩序と智謀との開發によつて傑出したる、また此等の事物に最も大なる犧牲をささげることに慣れたるある國民は、自ら進んで叫び出すであらう、『我々は劍を折らうと思ふ』と。そしてその軍隊組織全體を最終の土臺石に至るまで取り毀つてしまふであらう。最も丈夫に守られたところで、感情の高さから自らを防禦なしにする、これが、つねに平和な心の上に休まねばならぬところの、本當の平和に至るべき手段である。今日あらゆる國々に流行してゐる所謂武裝の平和は、好戰的な心の徵證である、自らをも隣人をも信賴せず、半ばは憎惡から、半ばは恐怖から武器をすてないところの心の徵證である。憎惡したり恐怖したりするよりも、むしろ滅亡する方がよく、自らを憎惡さしたり恐怖さしたりするよりも、むしろ滅亡する方が二倍もよい事だと——これが早晩各の政治的社會に於ける最上の格言にならなければならぬ。我我の自由主義の人民代表者等は、よく知れてゐるごとく、人間の性情についての反省にまでの時を缺いてゐる。でなければ彼等は、彼等が『軍隊的負擔の漸次的削減』の爲めに働いてゐるとき、むなしく働いてゐることを知るであらう。むしろ、かうした種類の困迫が最も大きいときにはじめて、ここにのみ助けてくれるやうな種類の神もまた最も近くゐるであらう。軍隊的光榮の樹はただ一打でもつて、電光の一閃によつて破壞され得るのである。しかしながら、けに汝等が知れるごとく、電光は雲から、上から下りて來る。

二八五

財産が正義と差引され得るや否や。――財産の不義が強く感得されるとき――大きな時計の指針が今一度この場處にある――我々はそれを脱却すべき二の方法を擧げる。第一には、平等に分配するのである。第二には私有を廢して財産を社會に歸してしまふのである。後者はとり分け我々の社會主義者の心にかなつてゐる。そして彼等は、『汝盗むなかれ』と言ふところの、あの古代猶太人を怒つてゐる。彼等の見解に從へば、第七の誡（譯者――註第八の註の誤なり）はむしろ、『汝所有するなかれ』とあるべきである。前者は古代に於て屢々試みられた方法である。しかもつねにただ小規模にのみ行はれたのであるが、どうもうまく行かなかつた。我々はこの失敗からも學ぶことが出來る。『平等の耕區』はたやすく口にされる。しかしながら、如何に多くの苦々しさがその際に必然な分離と分別とによつて、古くから尊敬された所有物の損失によつて作り出されるか、如何に多くの敬虔が傷けられ犧牲にされるか！　我々は境界の石を掘り起すとき道德を掘り起してしまふ。そして再び、新しき所有者等の間に如何に多くの新しき苦々しさがあり、如何に多くの羨望と嫉視とがあるかよ！　なぜと言つて、そこにはかつて實際に平等なる耕區と言ふものがあり得なかつた。そしてよしそんなものがあつたとしても、隣人に對する人の義望はその平等を信ずることから彼をさまたげるであらう。そしてこの、已に根を毒された不健全な平等が、いかに長く持ちこたへることぞ？　僅々數代の中に、相續によつて、ここには一の耕區が五の頭に分けられたり、そこには五の耕區が一の頭に歸したりする。そして嚴重なる相續法によつてかくのごとき不都合を防いだとしても、成るほど平等の耕區は存するであらうけれど、その間には近親や隣人に對する反感と、あらゆる事物の顚覆に對する願望とのほか、何物をも有しないやうな缺乏者不平家がゐた。ところでもしも我々が第二の方策に從つて、財産を社會へ返し、各個人をただ一時的の小作人にのみするならば、我々は耕作地を破壞してしまふ。なぜと言つて人間は、彼がただ一時的にのみ所有するところのすべての物に對して、注意と犧牲とを拂はないからである。かくのごとき財産に對しては、彼は盗賊のごとく、或はだらしなき浪費者のごとく、あとは野となれ山となれである。プラトオが、利己が所有の廢止と共に除かれるべきことを謂ふとき、我々は彼に對して答へることが出來る――もしも利己がとり去られるならば、人間はもはや四の大なる德をも所有しなくなるであらうと。最も恐ろしき疫病は、あだかも虚榮心が他に消え失せねばならなかつたときの如く、左樣に恐ろしく人類を傷け得なかつたと、私共の言はねばならない如く。虚榮心と利己となしに、何が人間の德であるか？　私がかう言ふのは、此等の德が此等の二の性質に對する異つた名稱假面たるにすぎないと言ふやうなものである。今日尙ほ社會主義者等から歌ひ續けられてゐる、プラトオのユウトピア的基本諧調は、人間に對する不十分な智識に土臺を置いてゐる。彼は道德的感情の歴

史學を、人間精神の善良にして有用なる性質の起源に對する洞察を缺いてゐた。彼はすべての古人のごとく、黑と白とを信ずるごとく善と惡とを信じた――卽ち、善人と惡人との、竝びに善き性質と惡しき性質との根本的な差別を信じた。財產が今後より多くの信任を吹き込み、より道德的になり得ることの爲めには、我々は小さな財物に到るべき勞作のあらゆる道を開いて置かなければならぬ。けれども骨の折れない、突然なる富の所有を阻止しなければならぬ。乃ち、我々は大なる財物の蓄積にまで好都合なる、運送や交易のあらゆる部門を、とり分け銀行業などを、私人もしくは私設會社の手からとり上げてしまはなければならぬ。そしてあまりに多くを所有してゐる者をも、何物をも所有してゐない者同樣、社會にとつて危險なものと見做さなければならぬ。

二八六

勞働の價値。――もしも我々が、如何に多くの時間や、勤勉や、善意もしくは惡意や、拘束や、獨創もしくは怠惰や、正直もしくは外飾の用ひられたかによつて、勞働の價値を決定しようと欲するならば、則ちその價値は決して正しくあり得ないであらう。なぜと言つて、人格全體が秤盤に置かれ得なければならなかつた。そしてそれは不可能の事であるから。ここに『審くなかれ！』と云ふ文句がある。しかしながら、正義を呼ぶ叫びは、今日勞働の評價に滿足してゐない所の人々から聞いてゐるのだ。もしも我々がより遙かに考察をすすめるならば、我々は各の人格がその產物に對して、勞働に對して責任を負つてゐないことを見出す。されば眞價は決してそれから抽き出されない。そして各の勞働は、それが力や、弱さや、智識や、熱望のこの、或はその連結によつてあらねばならぬだけ、それだけ善く、もしくはそれだけ惡いのである。勞働者は彼が働くべきや否やをも、如何に彼が働くべきかをも、心のままになし得ない。ただ狹き廣き、有用の見地だけが勞働の評價を作つた。我々が今正義と呼ぶところのものは、此分野に於て頗ぶる精練された有用として大に間に合つてゐる。そしてその有用はその瞬間にただ顧慮を用ひ機會をとるばかりでなく、あらゆる情況の持續に心をむけ、かくして勞働者の幸福をも、彼の肉體上精神上平和をも眼中に置くのである――彼と彼の子孫とが我々の子孫の爲めによく働き、人間生活の個人的のひろがりよりも、より長き期間に對して信賴すべくなり得ることの爲め。勞働者をさんざ使ひ倒すのは、今我々の理解するごとく、一の愚劣である、將來に損のかかる掠奪的建設である。社會を危くするものである。今我々は殆んど已に戰をもつてゐる。そしてどのみち平和を維持したり、條約を締結したり、信任を獲得したりすることの費用は、こののち甚だ大きくなるであらう。なぜならば使ひ倒す者共の愚劣が甚だ大きく持續的であつたから。

二八七

社會體の研究について。――歐羅巴に於て、特に獨逸に於て經濟學政治學を研究しようと思ふ者にとつて最もよろしくないのは、實際の情態が規則を說明する代りに、除外例をもしくは過度と結局とを說明すると言ふことである。されば我々は實際に存在するところの情態のあなたを見るべく、また例へば我々の目を遠く北亞米利加（そこでは、もし我々が欲するならば、我々はまだ、社會體の原始的正則的な運動を考察し研究することが出來る）の方へむけるべく學ばなければならぬ。獨逸に於ては、これは厄介な歷史的研究を要する、或は前に言つた通り、一の望遠鏡を要する。

二八八

どれほどまで器械が卑しくするか。――器械は非人格的である。それは仕事の斷片からその誇りを奪ひ、各の器械的作業ならぬものに拘着する、その個々の眞價や缺點を奪ふ。乃ち人間性のそれの分を奪ふ。從前はすべて勞働者等から買ふのは人格――その徽章でもつて人々がとりまかれてゐた――を取り上げて顯はすことであつた。されば家具及び衣服は相互の尊重及び人格的聯結の象徵になつた。しかるに一方では、今日我々はただ無名の非人格的の奴隸制度の間にのみ生きてゐるやうに見える。我々は勞働の容易化をあまりに高く買つてはならぬ。

二八九

百歲の檢疫。――民主的施設は專制的な欲求の古い疫病に對する檢疫所である。かくのごときものとして甚だ有用であり、甚だ面倒である。

二九〇

最も危險なる黨人。――その人の背反が黨全體を滅ぼすであらうといふやうな人間こそ、最も危險なる黨人である。乃ち、最も善き黨人がそれなのである。

二九一

運命と胃腑。――騎手の體の中なる一片だけより多くの、もしくはより少きパンとバタとは、往々にして競爭や賭博を決定し、かくして數千の幸福や不幸を決定する。國民の運命がまだ外交家に繫つ

てゐる限り、外交家の胃はつねに愛國的憂懼の對象であるであらう。Quousque tandem —

二九二

民主主義の勝利。——今日ではすべての政治的權力者等は、自らを強くする爲め社會主義に對する恐怖を道具に使はうと試みる。しかしながら長い間には、民主主義だけがそれから利益を獲る。なぜと言つて今日あらゆる黨派が『民衆』に諂ふべく、そして彼等にあらゆる種類の輕易と自由とを賦與すべく餘儀なくされてゐる。その結果、民衆は遂に全能的になつて來てゐる。民衆は財產取得の變更の說として、社會主義から最も遠く離れてゐる。そしてもしも彼等にして、彼等の議會に於ける大多數者を通じて、舵車を彼等の掌中に握るならば、彼等は累進稅を以て資本家や、商人や、財政家等を攻擊するであらう。そして實際徐々に、打ち克たれたる疾病のごとく社會主義を忘れ得べき中流階級を作るであらう。かうした增進するところの民主化の實際的結果は先づ歐羅巴の國民同盟であるだらう。そしてそれに於ては各個の國民が、地理上から都合よく區劃されて、別々の權利をもつた一州の地位を占めるのである。前に存在してゐた國民の歷史的記憶はその際あまり多く勘定に入れられないであらう。なぜならば、此等の記憶に對する信心ぶかき感じは、漸次、改革を欲するところの、試驗を熱望するところの、民主的支配の下に根を掘り起されるであらうから。その際必要に見えるところの境界の修正は、大なる州の功利にまで、同時に同盟全體のそれにまで役立つ、けれども何等かの古びたる過去の記憶にまで役立たないと言ふやうに行はれるであらう。此等の修正に對して視點を見出すのは、將來の外交家等の仕事であるだらう。そして彼等は同時に文明の研究者や、農業者や、交際の黑人であらねばならず、また動因と功利とのほかに何等かの軍隊をも自分の背に有たないであらう。そのときはじめて外的の政治が內的の政治と分ちがたく結びつけられる。ところで今日後者はやはりその高慢なる命令者に從ひ、みじめなる小籠の中に、前者の收穫からのこされたる苅株を集めると言つてゐる。

二九三

民主主義の目的と手段。——民主主義は出來るだけ多くの獨立を造り且つ保證しようとする——意見や、生活のしかたや職業の獨立を。此目的の爲めに民主主義は、人間の容しがたき二の階級として、無財產の者共からも本當に富有な者共からも、政治上の投票權をまき上げてしまはなければならぬ。此等の階級の除却に於て、民主主義はつねに働かねばならぬ。なぜならば此等の階級はその任務

をいつもいつも疑問に置くからである。同じやうに民主主義は黨派の體制をめざすやうに見えるすべての物を阻止しなければならぬ。けだし、あの三重の意味に於ける獨立の三の大なる敵は、無財產者と、金持と、黨派とである。私が民主主義について云爲するのは、來るべき或る物について云爲するのである。既に今日その名によつて呼ばれるところのものも、それが新しい馬と共にかけると言ふことによつてのみ、より舊き政府の形式と區別される。街路は尙ほ昔のままである。車輪も尙ほ昔のままである。危險は民衆の幸福のかうした乘り廻しによつて實際より少くなつたか？

二九四

愼重と成功と。——根本的に德の德であり、その祖先その王であるところの愼重と言ふ大なる性質は、通常の生活に於ては必ずしも常に成功を招かない。求愛者にしてもし、ただ成功の爲めにのみあの德を求めたならば、彼は彼自らを欺かれて見出すであらう。けだし愼重は實際的な人々の間に疑はしいものにされてゐる。そして狡猾や僞善と混淆されてゐる。明らかに愼重を缺いてゐる人間は、輕卒に物を捕捉し、折々捕捉し損ふところの人間は、彼自身に對する先入見を抱かれてゐる——彼が正直な信賴すべき男であるといふ。されば實際的の人々は、愼重は人間を好まない——彼が彼等にとつて一の危險であると考へるところから。加之、我々は屢々愼重な人間を臆病で、褊狹で、衒學的であるやうにきめてかかる。非實際的な、蝶々のやうな人々は、彼を心持わるく感ずる。なぜならば彼は、行爲や義務を考へずに、彼等のごとく呑氣に生活しようとしないからである。彼は彼等の間に、彼等の良心の權化のやうに見える。そして蟬かしき日も、彼の面前では彼等の目に朧に見える。かくて成功と人氣とが彼をにけるとき、彼は往々ひそかに自らを慰めるために言ふ、『汝が人間の中に最も高價なる品物を所有してゐたことに對して拂はねばならないところの稅金は左樣に高い——それはそれだけの價値をもつてゐる！』

二九五

Et in Arcadia ego. ——私は丘陵の波を越えて、樅の木やおごそかな松の木を通して、乳綠の湖水の方を見やつた。私のまはりのあらゆる種類の岩塊を、花や草でさまざまに彩られたる地面を見やつた。一群の家畜が動いて、開いて、私の前に擴がつた。遠くには、はなればなれの牝牛やその群が、最も鮮やかな夕方の光の中に、檜のそばに。他のものはより近く、より暗い。すべてが安息と夕方の飽滿との中にゐる。時計は六時半を示した。群の中の牡牛は白く泡立つところの小川へ入つた。そし

て徐ろにその進路に逆つたり從つたりしながら行つた。かくして彼は恐らく彼一流の獰猛なる悦びをとつたのであらう。ベルガマスク種の暗褐色な二人の者が牧人であつた。殆んど少年のごとく着物をきたところの少女である。左手には、廣い森の帶の上に、かざしかけた斷崖や雲の野がある。右手には、私の上に高く、この大きな氷に覆はれた尖頭が、日のあたつた靄のゑエルの中にひかつて——すべてが大きく、靜かに、明るい。『全體の美しさは恐怖を吹き込み、その瞬間及びその啓示に對する無言の禮拜にまで導くのであつた。知らず知らず、あだかも何等のより自然なものもなかつたかのごとく、人々はこの清らかな澄み切つた光の世界(全く何等の熱望的なもの、前望後顧するものをもつてゐなかつた)に、希臘の勇者等と共にゐた。人々はブウサンとその弟子等が感じた如く、卽ち、英雄的に感ずると共に牧歌的に感ぜねばならなかつた。かくのごとく個々の人間も生きた。かくのごとく絶えず世界の中に自らを、自らの中に世界を感じた。そして彼等の間にも、最も大なる人間の一人、英雄的牧歌的哲學の創始者たる人が、卽ちエピクウルがゐる。

二九六

計算と測定。——多くの事物を見たり、他と量り比べたり、計算し合せたり、それらのものから急速の結論を、立派に確實な總計を作つたりする——これは大なる政治家や、將軍や、商人をつくり上げるに足る。かうした性質は敏速なる心的計量の力である。ただ一の事物を見たり、その手に行動への唯一の動機を、ほかのすべての行動の指導的原理を見出したりするのは、勇者を、また狂信家をも作りあげる。乃ちこれは、一の尺度を以て計量する上の練達を意味するのである。

二九七

時の來ないのに見ることを欲しない。——我々が何物かを經驗する限り、我々はその經驗に身を委ねて我々の目をふさがねばならぬ。乃ち我々を經驗してゐるものの觀察者になつてはならぬ。なぜと言つて、それは經驗されたものの善き消化をさまたげるであらう。そして智慧の代りに我々はそれの不消化を獲るであらうから。

二九八

賢き人の實踐から。——賢くなる爲めには、我々はある經驗を經驗しようと欲しなければ、乃ち彼の顎の中へとび込まなければならぬ。勿論これは甚だ危險である。多くの『賢人』はそれをする際に食

はれてしまつたのである。

二九九

精神の疲勞。――人間に對する我々の折々の冷淡無頓着――それが硬さとして、また性格の缺陷として我々の上に難じられてゐる――は、屢々ただ精神の疲勞である。この情慾に於て他の人々は我々にまで、丁度我々が我々自らにまでのごとく、無頓着であり面倒臭さうにしてゐる。

三〇〇

『一の物が必要だ』。――我々が怜悧であるならば、我々の要する一の物は、我々が心に悅びをもつてゐるといふことだ。『ああ』と誰かがつけ加へて言ふ。『我々が怜悧であるならば、我々の爲す最もよきものは、賢明であるといふことだ』。

三〇一

愛の證據。――或る人は言つた、『二人の人間について、私は曾つて徹底的に考へて見たことがない。それが彼等に對する私の愛の證據である』。

三〇二

如何に我々は惡しき論證をより善くしようとつとめるか。――多くの人々は彼の惡しき論證にまで更に彼の人格の一片を附け加へる――さながらそれがこれによつてより正當にその道を走り、眞直ぐな善き論證に變化するであらうかのごとく。丁度、九柱戲をやる人々は、投げたのちにすらも、尙ほ且つ身振りや姿勢を以て球に方向を與へようと試みるやうなものだ。

三〇三

正直。――權利や財產に關して模範的の人間であると云ふのは、まだつまらない事である。例へば少年として決して他人の果樹園に果物を盜まないとか、大人として苅入のすまぬ畑に踏み入らないとか言ふやうなのは――かうした小さな實例は、勿論、大なる實例よりもかうした種類の模範的性質に對して、より善き證據を提供するのであるが、それはまだつまらない事である。人々はそのとき尙ほ『適法の人物』たるにすぎない――『社會』すらも、人間の群すらも及第するやうな程度の道德をもつた。

三〇四

『人…』——最も浮誇なる人間の虚榮心も何であるか——最も謙讓なる人間が、自然及び世界の中に『人』として自らを考へる場合感ずるところの、あの虚榮心に比べて見たならば！

三〇五

最も必要な體操。——小さな事柄に於ける自制の缺陷を通して、大きな場合に於ける同樣の缺陷が徐々に起つて來る。我々が少くとも一度何等かの少さな物を自分自身に拒まなかつたとてその各の日は、悪しく用ひられ、次ぎの日に對する危險になる。かうした體操は、若しも我々が我々自らの主人であることの悦びを維持しようと願ふならば、なくてならぬものである。

三〇六

自分自身をなくすること。——我々がはじめに我々自らを見出したならば、我々は理解しなければならぬ——如何に折々自分自身をなくし、やがて再び自分自身を見出すべきかを。けだしこれは、我

我が思想家であると假定してのことである。思想家にとつては、つねに一人の人間に結びつけられてゐるのは損害なのである。

三〇七

何時別れるのが必要であるか。——汝は汝が認識し計量しようと欲するところのものから、少くとも一時の間別れなければならぬ。汝が市を去つたときにのみ、汝はその塔が如何に高く家々の上に聳えてゐるかを見るのである。

三〇八

正午に於て。——人生の活動的な騒々しき朝をあてがはれた人は、その人生の正午に於て彼の魂が、一の奇異なる休息欲に襲はれる。そしてその休息は數ヶ月數ヶ年に亙つて續くかも知れない。彼の周圍は靜かになる。聲音はとほく、より遠く聞える。太陽は彼の眞上から照らしつける。かくれたる森の草原に、彼は大なるパンが眠つてゐるのを見る。自然のあらゆる物がパンと共に眠つてゐる——その顔には永久と言ふことの表白をもつて。かくのごとく彼には思はれる。彼は何物をも欲しない。彼

は何物にも煩はされない。彼の心臓はとまり、彼の目だけが生きてゐる。それは目をあけてゐての死である。そのとき人間は、彼がかつて見なかつたところの多くの物を見る。そして彼の目のとどく限り、すべては光の網に編み込まれて居り、また謂はばその中に埋められてゐる。彼は幸福に感ずる。しかしながら、それは重つくるしき、重つるくるしき幸福である。そのとき遂に樹木の間に風が起り、正午が去る。人生は再び彼をつれて去る——人生はめしひたる目をもつて、その背に騒々しき従者を(願望や、幻想や、忘却や、享樂や、破却や、衰滅などを)従へて。かくて朝よりもより騒々しき、より活動的な晩が來る。本當に活動的な人間にとつては、此等の引きのばされたる認識の情態は、殆んど物凄く且つ病的である。けれども不愉快ではない。

三〇九

自分の肖像をかいた畫家を警戒する。——一の肖像畫に於て、ある人の可能なる最も十分なる表情を畫布の上にかき現はしたところの大なる畫家は、彼がその男をその後實生活の中で見るときつねに考へるであらう——ただ鳥羽繪を見てゐるやうにのみ。

三一〇

新しき生活の二の原理。——第一の原理。我々は生活を最も確實なもの、最も證據立て得べきものの上に整理して置かねばならぬ。これまでのごとく、最も遠きもの、最も不定なもの、最も地平線上の雲然たるものの上に整理して置いてはならぬ。第二の原理。我々は最も近きもの及び近きものの、より安全なもの及びより少く安全なものの階級を確立して置かなければならぬ——我々が我々の生活を整頓し、それを究極の方向へむける前に。

三一一

危險なる苛立たしさ。——天分のある、しかしながら怠惰である人々は、彼等の友人の一人がしつかりした作品をし上げたとき、つねにどれ丈けか苛立たしく見えるであらう。彼等の嫉妬心はめをさまされてゐる。彼等は彼等自らの怠惰を恥ぢてゐる。或はむしろ、彼等は彼等の活動的な友人が今前よりも以上にすらも彼等を輕蔑するであらうことを恐れてゐる。かくのごとき氣分に於て、彼等はその新しき作品を批評する。そして作者の非常なる驚きにまで、彼等の批評は復讐になつてゐる。

三一二

幻想の破壞。――幻想はたしかに費用のかかる娯樂である。しかしながら、幻想の破壞は更により高價である――それが多くの人々にとつて否定しがたき娯樂であるごとく、娯樂として考へられた場合。

三一三

『賢人』の單調。――牝牛は折々、質疑をなす爲めに途上に立ち止まるところの、驚異の表情をもつてゐる。一方ではより高き聰慧の目には、nil admirari（何物をも驚異せざること）が、雲なき天の單調のごとくひろがつてゐる。

三一四

あまりに久しく病氣をしないやうに。――我々はあまりに久しく病氣をしないやうに氣をつけなければならぬ。けだし、見物はやがて、同情を示すと言ふ彼等の習慣的な義務によつて苛立たしくなつて來る。なぜならば彼等はかうした情態を久しく維持して行くことをあまりに骨折れるものに感じて來るからである。その時彼等は直に我々の性格に疑ひをかけ出して來る。そして結論をつけて曰く、『汝等は病氣をすることを値してゐる。そして我々はもうこの上同情を示すことに努力するを要しない』と。

三一五

熱狂者等への相圖。――つれ去られたいとねがふ、そして上の方へたやすく運ばれて行きたがる人間は、彼が餘りに重くならないやうに氣をつけねばならぬ。例へば彼は多くの事を學んではならぬ。とり分け科學を教へ込まれてはならぬ。科學は重つくるしくする！　注意せよ、汝等熱狂者等よ！

三一六

自分自身を驚かすことの智識。――自分があるごとく自分自身を見ようとねがふところの人は、手に松火をもつて、自分自身を驚かすことを知らなければならぬ。なぜと言つて、精神的な物について言へることは、肉體的な物についても言へる。鏡の中に自分自身を見ることに慣れたる人は、彼の醜

さを忘れてしまふ。そしてただ肖像畫家の力をかりてやつとその印象をとり返すのである。しかしながら彼はその畫にも慣れて來る。そして再び彼の醜さを忘れてしまふ。この中に我々は、人間が一瞬間でなければ、不變の醜さに堪へないと言ふ普遍的法則を見る。彼はいかなる場合に於ても、それを忘れる、或はそれを否定する。道學者等は、彼等の眞實を持出すことの爲めには、その『瞬間』を計量して置かなければならぬ。

三一七

意見と魚と。――我々は我々が魚の所有者であるごとく、我々の意見の所有者である――若しくは、我々が養魚池の所有者である限りに於て。我々は漁りに出かけて行き、好運をもたなければならぬ。そのとき我々は我々の魚を、我々の意見をもつ。私は今、生きた意見について、生きた魚について言つてゐるのである。他の人々は一の化石した小房を所有するとき、そして彼等の頭に『信念』を所有するとき滿足してゐる。

三一八

自由と束縛との徵證。――出來るかぎり自分で自分の需要をみたして行くのは――いかに不完全であらうとも――精神上竝びに身體上自由への途である。多くの、しかも不用なる要求をみたすのは、出來るだけ完全にみたすのは、束縛への訓練になる。自分の身につけてゐた内外一切のものを、自分で儲け、自分で作つたところの詭辯派ヒッピアスは、それによつて精神上竝びに身體上最高の自由を代表してゐる。すべてが同じやうに善く且つ完全に爲されたといふことはどうでもよい。誇りが最も損害の多い場處をさへ繕つてくれるのである。

三一九

自分自身を信ずること。――我々の時代にあつては、我々は自分自身を信ずるところの各の人を信じない。以前はそれが人をして自分を信ぜしめるのに足つた。今日信仰を見出す爲めの處方に曰く、『汝自身を愛惜するな！汝が汝の意見を信ずべき光の中に置かうと思ふならば、先づ汝自身の小屋に火をかけよ！』

三二〇

より金持に、且つ同時に、より貧乏に。――私は一人の人間を知つてゐる。彼は子供のとき已に人間の理智性について、乃ち、精神的事物に關する彼等の本當の歸依について、眞實として認められたものに對する私心なき推量について、よく考へることに慣れてゐた。しかしながら彼は、彼自らの頭(判斷だとか、記憶だとか、沈着だとか、想像だとか云ふやうな)については、謙讓な、否輕侮した概念をもつことに慣れてゐた。彼は彼自身を他の人々と比較したとき、彼自らに何等の價値を置かなかつた。今年の加はるにつれて彼は、初めは一度、次ぎには百度も、此點に於て學び直すべく餘儀なくされた。人々は彼等の大なる悅びと滿足とにまで考へたことであらう。全くのところ、多少はさうでもあつた。しかしながら彼が曾つて言づたごとく、『しかし、私が從前の生活に於て知らなかつたやうな、もつとも苦い種類の苦さが混じられてゐる。なぜと言つて、私が人々と私自身とをより正しく評價することを學んだ後、私の精神は私にまでより少く有用であるやうに見える。私はそれでもつて、辛うじて尙ほ何等かの善きものを證明し得るやうに思ふ。なぜならば他の人々の精神はその善きものを理解し得ないからである。今私は、助けを與へるものと、助けを求むるものとの間なる恐ろしき裂目を、いつも私の前に見てゐる。かくて私は、私の精神を私自身の爲めに有つことの、竝びに自分ひとりで享樂せねばならぬ――それが享樂し得べきものである限り――ことの困厄に苦められる。しかしながら、與へるのは有するよりも幸である。そして沙漠の孤獨の中にあつて最も富んでゐるのは誰であるか?

三二一

如何に我々は攻擊すべきか。――その爲めに人々が何物かを信じたり、信じなかつたりするところの理由は、最も希なる人々に於て、それがあり得るだけそれだけ强力である。一般に、一の信仰を振ひ落すべく、最も重き攻擊の武器を使用するのは、全く必要でない。多くの人々は單にある騷ぎを以て攻擊することにより、彼等の目的を達する。げに、往々紙鐵砲でもつて足りるのである。甚だしく浮誇なる人々に對しては、强き攻擊をしさうな樣子で足りる。彼等は甚だ嚴重にとり扱はれてゐるのを見る。そしてわけなく讓步してしまふのである。

三二二

死。――死の確實な見込みによつて、各の生にまで一の貴重なる、匂よき輕浮の滴が混じられたかも知れない。そして今汝等奇異なる藥劑師の魂は、それからして口にうまくない毒の一滴――それに

よつて生全體がいやなものになるところの――を作つた！

三二三

悔恨。――悔恨にはどんな事があつても自由の活動をさせるな。むしろ直に汝等自らに言へ、『これはけに第一の愚劣に第二の愚劣を添へるのである』と。もしも汝等が傷害を作り出したならば、汝等は善い事を作り出したやうに思つてゐなければならぬ。もしも汝等が汝等の行爲の故に罰しられるならば、それによつて既に何等かの善い事が爲されるのだと言ふ感情の下に、その刑罰を堪へ忍べ。乃ち汝等は他人を同じ愚行に陥ることからくひとめるのである。各の罰しられたる非行者は、人類の恩惠者として自らを感ずべき權利を有する。

三二四

思想家になる。――人にしてもしも、欲情や、人間や、書物なしに、各の日の少くとも三分の一を費さないならば、如何にして思想家になることが出來ようぞ？

三二五

最善の醫藥。――少しばかり健康が進んだり退いたりするのは、病人にとつて最善の醫業である。

三二六

觸るな。――ある恐るべき人々は、一の問題を解決することの代りに、それと關係しようとするすべての人々の爲めに、紛糾させ、より解きがたくする。うまく正鵠に中てることを知らない者は、全然中てないやうに願ひ求められねばならぬ。

三二七

忘れられたる自然。――我々は自然について語る。そしてさうしながら我々自らを忘れる。我々自身は自然である（たとひ……）。されば自然は、我々が彼女の名の擧げられるときに感ずるところのものと、まるで異つた或るものである。

三二八

深みと退屈と。——深い井戸に於けるがごとく、深い人間に於ては、それに落ち込むところのある物がその底へ屆くまでには、長い時を要するのである。通例十分に久しく待つことをしないところの見物は、かくのごとき人物をややもすれば鈍感に硬ばつた人物と——もしくは退屈な人物とも見做すものである。

三二九

何時自分自身に忠誠を誓ふべきか。——我々は折々、我々の天分に矛盾するところの精神的方向へ踏み込む。一時の間我々は、潮や風に逆らつて、實際自分自身に逆らつて勇壯に奮鬪する。しかしながら結局我々は疲勞して息苦しくなつて來る。我々が成し遂げるところのものは、何等の本當の悅びをも我々へ與へない。我々はこの成功によつてあまりに多くを償つたやうに思ふのである。加之、我々は恐らく勝利の眞中に於て、我々の將來について、我々の多產性について絕望する。終に、遂に我々は引き返す。そして今風は我々の帆をふくらまし、我々を我々の航路へ追ひやる。何等の幸福ぞ！ 我

我は我々自ら勝利について如何に確實に感ずることぞ！ 今こそはじめて我々は、我々が何であるか、また何を我々が願望してゐるかを知る。今我々は我々自身に忠誠を誓ふ。そしてそれをなすことの權利を有する——知つてゐるところの人間として。

三三〇

天氣豫報者。——丁度、雲が我々の上に高く風の吹き過ぎる方向を我々に漏らすごとく、最も輕く且つ最も自由な精神は、その進路の中に將來の天氣を豫報してゐる。谷間の風と今日の市場の輿論とは、來るべきものに對して何等の意義をもたず、ただ過ぎ去つたところのものに對してのみ意義をもつてゐる。

三三一

不斷の加速。——のろのろと始め、そしてある事物と親熟するに骨の折れるそれらの人々は、そのち往々不斷の加速の性質をとる——その爲め遂に何人も、その潮流が彼等を何處へ連れ去るかを知らないといふほどに。

三三二

三の善きもの。——偉大と、安息と、日光と——この三のものは、思想家が願望し、また自分自身から要求するところの一切を包括する。理智的及び道徳的範圍に於ける、加之、日常の生活方法に於ける、彼の住居の風物に於ける、彼の希望や義務を、彼の要求を包括する。此等のものに相應するのは第一に、持ち上げるところの思想、第二に、落ちつかせるところの思想、第三に、明るくするところの思想である。けれども第四には、すべての三の性質に分前をもつところの、その中にすべての塵界的なものが姿を變へてしまふやうな思想である。これは、悅びの大なる三位一體が支配するところの國土である。

三三三

『眞實』の爲めに死ぬる。——我々は我々の意見の爲めに燒き殺されないであらう。我々はそれほどそれをたしかなことに思つてゐない。しかしながら我々は、我々の意見を有つたり變へたりする權利の爲めには燒き殺されるかも分らない。

三三四

市價を有する。——もしも我々が我々のあるだけそれだけ多くのものとして通用しようと思ふならば、我々は市價を有するところのあるものであらねばならぬ。しかしながら、ただ日常的なものだけが市價を有してゐる。乃ち、かうした願望は聰慧なる謙遜の、でなければ愚鈍なる不遜の結果である。

三三五

家を建てる人々に對しての道德。——我々は家が建てられたとき、足場をとり拂つてしまはなければならぬ。

三三六

ソフォクレス主義。——誰が葡萄酒の中へ、希臘人共より以上に水を注ぎ入れたか？　眞面目さと優美との結合、それがソフォクレスの時代及びその後の、アテン人共の貴族的特權であつた。模倣し得る者はあれを模倣せよ！　生活に於て竝びに創作に於て！

三三七

英雄的なもの。――英雄的なものは、自らを他人との競爭に於て感ずる、他人を前にしての競爭に感ずることなしに、立派な事をする（或は何等かの事を立派にしないで置く）と言ふことの中に成立する。英雄は彼の行く何處へでも、つねに荒涼と神聖にして犯すべからざる境界を携へて行く。

三三八

自然の中なる「生き寫し」。――自然の中の多くの地域に於て我々は、快き戰慄と共に自身を再び發見する。それは最も美しき「生き寫し」である。さうした感情を丁度此處にもつところの人は、如何に幸福であらねばならぬかよ――この絶えず日當りのよき十月の空氣の中に、朝から晩まで吹き渡る、このいたづらな、幸福な風の中に、この最も清らかな明るさと、最も程よき涼しさとの中に、この高原に於ける小山や湖水や森の、樂しき嚴かな景色（永久の雪の恐れについで恐れけなく陣取つたところの）の中に、伊太利とフィンランドとが一になつて居る、また自然のあらゆる銀的の色調の鄕土であるやうに見える此處に。下のごとく言ひ得る者は如何に幸福であるかよ。曰く、『なるほど自然の中には、多くのより大なるものより美しきものがある。しかしながらこれは、私にまで親密であり、血緣のあるものであり、否更にそれ以上のものである』と。

三三九

賢人の丁寧。――賢人は知らず知らず、他人の人々との交際に於て、ある君主のごとく丁寧に振舞ふ。そして天分や、身分や、文化のいかばかり異つてゐようとも、ややもすれば同樣のものとして取扱ふ。それが氣付かれるや否や、彼はその爲めにひどく惡くとられるのである。

三四〇

金。――金であるところのすべての物はぴかぴかと照り輝かぬ。あの柔かな光はあの最も高貴なる金屬に特有なのである。

三四一

車輪と制動機と。――車輪と制動機とは別々の義務をもつてゐる。しかしながら一の同じ義務をも

もつてゐる――互に他を傷け合ふといふ義務を。

三四二

思想家の攪亂。――思想家を彼の思想に於て妨げる(人々の言ふところに從へば、攪亂する)ところのすべての物は、藝術家に自らを提供すべく扉を通じて入つて來るところの、一の新しき模型としておだやかに觀られなければならぬ。妨害は孤獨なる者に食物を運び來るところの鴉である。

三四三

多くの才智を有すること。――多くの才智を有することは、人々を若くして置く。しかしながら人人は、丁度その爲めに實際よりも老けて取られることを我慢しなければならぬ。なぜと云つて、人は才智の筆蹟を生活經驗の徵證として、言ひ換へれば、多く且つ惡しく生活したことの、苦惱の、過失の、悔恨の徵證として讀むからである。乃ち、もしも我々が多くの才智をもつてゐて、そしてそれを示すならば、我々は人にまで、實際よりもより老けて見えると共に、またより惡しくも見えるのである。

三四四

如何にして我々は勝たねばならぬか。――我々は我々がただ、毛筋一本の幅ほど我々の敵手に凌駕することの見込を有するにすぎないとき、勝利をねがつてはならぬ。善き勝利は打ち勝たれたる者を悅ばせねばならぬ。我は恥辱を省いてくれるところの、或る神聖なものをもたなければならぬ。

三四五

優秀なる精神の妄想。――優秀なる精神は一の妄想から脫却するのに骨が折れる。なぜと云つてそれは、それが凡庸なる者共の間に羨望の念を起させ、また例外として感受されることを想像するからである。しかしながら事實上、それは不用なものとして、またそれがなくとも一向に不足を感じられないものとして受けとられてゐるのである。

三四六

清潔の要求。――意見の變更は、ある性質の人々に於て、衣服の變更と同樣、清潔の要求から來る

ところのものである。しかしながら他の性質の人々に於ては、それがただ彼等の虚榮心の要求からのみ來てゐる。

三四七

またある勇者を値する。――ことに、果物の熟するや否や、その樹を搖ぶるよりほか何事をもしなかつたところの一人の勇者がゐる。汝等には、これが餘りに小さなものに思はれるか？　さらば、汝等希くは彼が搖ぶつたところのあの樹を見よ。

三四八

何によつて智慧を測るべきか。――智慧の、成長は、膽汁の減少によつて精密に測定される。

三四九

誤謬を不愉快に言明する。――眞實が愉快に言明されると言ふのは、各人の趣味に適應したものでない。しかしながら少くとも、何人も信ぜざれ――誤謬が不愉快に言明されるとき、眞實になるのだと云ふことを。

三五〇

黄金の格言。――人間には多くの鎖が置かれてゐる――彼が禽獸の如く振舞ふことを忘れる爲めに。そして實際、彼はいかなる禽獸よりも、よりおだやかに、より理智的に、より悅ばしげに、より思慮ぶかくなつてゐる。しかしながら今彼は、彼が左樣に久しく彼の鎖を運んで來たこと、彼が左樣に久しく純潔な空氣と自由な運動とを缺いてゐたことの故に惱まされる。とは云へ此等の鎖は、私がいく度もいく度も反復するごとく、道德的、宗教的、形而上學的觀念のそれらの厄介な、そして意味深き誤謬である。そもそも又、鎖の病氣もまた打ち克たれた時に、第一の大なる標的（禽獸からの人間の分離といふ）は到達される。今のところ我々は、その鎖を取り除く我々の仕事の眞中に立つてゐる。そしてそれを爲す上に最高の細心を要してゐる。ただ高貴にされたる人間にのみ、精神の自由は與へらるべきだ。ただ彼にのみ生の輕減が近づいて彼の傷を癒す。彼は、彼が悅ばしさの爲めに生き、それ以上の如何なる目的の爲めにも生きないと云ふことを言ふ、第一の人間であらねばならぬ。如何なる他の口に於ても、『私の周圍に平和を、そしてあらゆる最も親しき事物に快適を』と云ふ彼の格言は

危險であらう。個人に對するこの格言に於て、彼はある古い、大なる、感動的な言葉を考へてゐる。その言葉はすべてのものに適用されたが、あらゆる人類の上に超然たるままになつてゐた――その旗をあまりに夙く飾るところの各人が突き當つて滅亡せねばならぬやうな、基督教が破船してしまふやうな、一の格言及び礁標として。思ふにまだまだ、すべての人々にとつてあの牧羊者（天が彼等自らの上に輝くのを見、『地の上には平和あり、人々の間には相互の好意あれ』と云ふあの言葉を聞いたところの）の運命をもつべき時代でないらしい。まだまだ個人の時代である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

影。汝が口にしたすべての物の中、何物もかの一の約束より以上に私を悅ばせなかつた。曰く、『汝等は再び、最も親しき事物の善き隣人になることをねがふ』と。これは我々憐なる影にも便宜になるであらう。なぜと云つて、汝等がこれまで我々をあまりに好んで誹毀したことを切めて自認せよ。

漂泊者。誹毀した？　しかしながら、何故に汝等はつひに汝等自らを辯護しないでしまつたか？　全くのところ汝等は我々の耳に近くゐた。

影。我々は我々自らについて語り得べく、汝等にまであまりに近くゐたかのやうに思はれる。

漂泊者。精緻なるかな！　甚だ精緻なるかな！　嗚呼、汝等影は我々よりも『より善き人間』である。私はそれに心づく。

影。尙ほ且つ汝等は我々を『厚かましい』と言ふ――少くとも一の事を、沈默して待つと云ふこと、善く理解してゐる（如何なる英吉利人もより善くそれを理解してゐない）ところの我々を。なるほど、我我は甚だ、甚だ屢々人間の從者の中に見出される。併しながら彼の奴隷の中に見出されるのでない。人間が光を恐れるとき、我々は人間を恐れる。少くともその限りに於て我々は自由である。

漂泊者。嗚呼、光は更にずつとより屢々人間を恐れる。そしてそのとき汝等も彼を棄てて去る。

影。私は屢々痛ましさを以て汝を棄てた。私は智識慾に燃えてゐる。その私にまで人間に於ける多くの物が暗黑のままでゐる。なぜならば、我がつねに彼と一所にゐるわけにゐないから。完全なる人間の智識を犧牲にしてでも、私は悅んで汝の奴隷になるであらう。

漂泊者。そもそも汝は知つてゐるか？――汝がそのとき思ひもかけず奴隷から主人にならないかどうかを。或はけに奴隷として殘るか、しかしながら汝の主人の輕蔑者として屈辱の、嫌惡の生活を營むか？　我々二人をして、汝が今まで享樂して來たやうな自由に滿足せしめよ――汝と私とをして！　なぜと云つて、自由ならぬものを見ることは、私の最も大なる悅を苦くし

てしまふ。誰かがそれを私と相分たねばならなかつたならば、最も善きものも私にまでいやな物になつたであらう。私は如何なる奴隷が私について知ることをもねがはない。この故に私はあの犬を好まない、あのずぼらな、尻尾をふるところの寄食者――はじめて人間の奴隷として『犬的』になつたところの、そしてやはり、主人に忠義であり、彼に從ふことさながら……と云はれるのを常とするところの――を好まない。

影。彼の影のごとく彼等は言ふ。思ふに私は今日汝に已に餘りに長く附き從つたであらうか？　それは最も長き日であつた。けれども我々はそれの終りに近づいてゐる。更に今少しの間を我慢せよ！草が濕つぽく、私は冷く感ずる。

漂泊者。おお、それは既に別れるべき時であるか？　そして私は最後に尙ほ汝を傷けねばならなかつた。私は、汝がより暗くなつたのを見た。

影。私は私の力に及ぶ色に於て赤くなつた。私に思ひ起されるのは、私が屢々汝の足下に犬の如く横つたこと、また汝がそのとき……

漂泊者。さて私は汝を悅ばすべくあらゆる速さに於て更に何物かをなし得なかつたか？　汝は何等の願ひをも有たないか？

影。何等の願ひをも――恐らくはかの哲學『犬』（譯者註――犬儒派の創始者なるディオゲネス）がアレキサンデル大王の前に表白したところのあの願ひを除いては。曰く、『私の太陽から少しばかり脇へよつてくれ。私はあまりに寒いから』と。

漂泊者。私は何をなすべきか？

影。――それらの檜の木の下へ歩いて行き、山の方へ見廻はせよ。太陽は沈んで行く。

漂泊者。――何處に汝はゐるか？　何處に汝はゐるか？

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

大正六年二月二十日印刷
大正六年二月廿八日發行

定價金壹圓六拾錢

飜譯者　生田長江

發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸
佐藤義亮

ニイチエ全集 (2)

發行所　東京市牛込區矢來町中の丸
新潮社
電話番町八〇九番
振替(東京)一、七四二番

印刷所　東京市牛込區榎町七番地
日清印刷株式會社
(印刷者)　本間十三郎

トエ6T-27

■「ニイチェ全集」第三編豫告

曙光

全一册

ニイチェ著
生田長江譯

——裝幀は『人間的な餘りに人間的な』に同じ——

別に題して『道德的先入見に關する思想』と云ふ。著者の所謂『沒自我の道德に對する戰役』の開始は、最も嚴密なる意味に於て、自由思想家フリイドリッヒ・ニイチェの勇敢なる第一歩也。乃ち、『人間的な餘りに人間的な』に於て先づ理想的な餘りに理想的なものより解放されたる彼は、本書に至つて更に人間的な餘りに人間的なものをも、實證論的反動の乾燥と低調とをも超脫し、藝術家ニイチェ自身への健全なる歸還を表明せり。而して前きに冷酷の否定を辿りしものは、その否定の道を行き盡くして、漸く熱烈の肯定に向はむとす。これは是れ、大なる否定の後の大なる肯定への一轉機也。壯烈なる新生命の曙光也。

東京・牛込・矢來　新潮社出版

終